

慈眼寺歴代住職墓

—新潟県柏崎市谷根 慈眼寺歴代住職墓跡発掘調査報告書—

2004

柏崎市教育委員会

慈眼寺歴代住職墓

—新潟県柏崎市谷根 慈眼寺歴代住職墓跡発掘調査報告書—

2004

柏崎市教育委員会

序

遺跡などの歴史的な文化財は、どのような時代に生み出されたものであっても、現代に生きる私たちに何かを語りかけてきます。丘の上に展開した縄文時代の集落跡、山野を切り開いて設けられた平安時代の製鉄炉跡、現在ある市街地の発祥となった室町時代の町屋跡など、私たちの住んでいる地域から多くの発見があり、そこから知ることのできる情報もさまざまです。そして、大きな面積が調査された遺跡ばかりではありません。集落の一角にある墓や塚、石仏・石塔・板碑といった石造物なども、私たちと空間を共有しながら、歴史を物語っている文化財といえるでしょう。

今回、谷根地区の行瀧山慈眼寺（真言宗）の墓地で2基の石室を調査しました。石室は、佛如（1786年没）と秀如（1816年没）という歴代住職の墓を移転する改葬工事の際に発見されたものです。谷根地区は、有名な和田屋敷石塔群をはじめ、石仏・石塔といった多くの石造物が集落のあちこちに分布しています。これらは、米山山麓から産出される豊富な岩石を利用して作成されたものですが、佛如墓・秀如墓の埋葬施設にも利用されました。上にあった墓標は墓地から境内に移転されましたが、石室は慈眼寺の手によって元の位置に保存され、調査後の現在でも見学できるようにされました。

今回の発掘調査は規模の小さいものではありますが、地域の歴史を探っていくには貴重なデータとなるのではないかと考えられます。ささやかな報告書ではありますが、本書が地域の歴史理解の一助となり、地域づくりや文化財保護のために活用されるとすれば、この上なく幸いに思います。

最後に、石室の発見を当市教育委員会に連絡し、調査や保存・活用に尽力してくださった慈眼寺の住職・役員・檀家の皆様、調査に参加された調査員、並びにご協力いただいた関係者に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成16年3月

柏崎市教育委員会

教育長 小林和徳

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字谷根地内に所在する慈眼寺歴代住職墓跡で実施された発掘調査の記録である。
2. 本発掘調査は、慈眼寺歴代住職墓改葬工事の際に地下から石室が発見されたことを契機とし、慈眼寺から依頼されて柏崎市教育委員会が主体となって実施したものである。
3. 発掘調査は、平成15年4月8日から同年4月18日まで現場作業を実施し、その後平成16年3月31日まで整理作業および報告書作成作業を行った。
4. 発掘調査の現場作業は、柏崎市教育委員会文化振興課の職員等を調査員として実施した。整理作業および報告書作成作業は、柏崎市小倉町の柏崎市遺跡考古館において、職員（学芸員）を中心に同館のスタッフで行った。
5. 発掘調査によって出土した遺物は、注記に際して遺跡名を「慈眼寺」と略し、遺構名、層序等を併記した。
6. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（柏崎市遺跡考古館）が保管・管理している。
7. 本報告書の執筆・編集は調査担当の伊藤が行った。なお、礫石の記載にあたっては、平吹 靖（文化振興課学芸員）の石材鑑定に基づいている。
8. 本書掲載の図面類の方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
9. 石室および墓標の図面は、柏崎市の委託を受けた株式会社オリスが写真補正測量による方法で作成した。また、遺物の実測図には、柏崎市の委託を受けた株式会社セピアスがデジタルトレースしたものもある。
10. 調査着手前の状況を撮影した写真には、慈眼寺檀家の吉川清司氏が撮影したものもある。
11. 発掘調査の準備段階から本書作成までは、慈眼寺の代表役員：五十嵐精峰氏（住職）・責任役員：深井一四氏（檀頭）・池田喜一氏・吉川清司氏・赤川 清氏をはじめとする檀家の方々から多くのご理解とご協力を賜った。また、この他の方々からも大変なご助力およびご教示などを賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

相羽重徳・今野沙貴子・品田高志・岡口慶久・滝川重徳・中野 純・野神 幸・平吹 靖
柏崎市産業振興部農林水産課・柏崎市都市整備部下水道課 (順不同・敬称略)

調　　査　　体　　制

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 相澤陽一（～10月29日）・小林和徳（10月30日～）

総括 小林清輔（文化振興課長）

監理・庶務 品田尚道（文化振興課埋蔵文化財係長）

調査担当 伊藤啓雄（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

調査員 村山孝行（文化振興課埋蔵文化財係工務員）

高橋恵美（文化振興課埋蔵文化財係臨時職員）

吉田正樹（文化振興課埋蔵文化財係臨時職員）

整理作業スタッフ

阪田友子（文化振興課埋蔵文化財係臨時職員）

大野博子・片山和子・黒崎和子・小林 薫

野田絵利子・月橋香奈子・萩野しげ子・吉浦啓子（柏崎市遺跡考古館 順不同）

目 次

| | |
|---------------------------|----|
| I 調査に至る経緯 | 1 |
| II 慈眼寺をとりまく環境 | 2 |
| 1 谷根地区の地理的環境 | 2 |
| 2 谷根地区の歴史的環境 | 4 |
| III 調　　査 | 7 |
| 1 調査の方法 | 7 |
| 2 調査の経過 | 7 |
| IV 住　職　墓—墓標と石室— | 9 |
| 1 住職墓の配置 | 9 |
| 2 佛如墓・秀如墓の墓標と石室 | 11 |
| V 出土遺物 | 17 |
| 1 遺物の概要 | 17 |
| 2 遺物各説 | 18 |
| VI 総　　括 | 20 |
| 1 慈眼寺佛如墓・秀如墓にみられる埋葬 | 20 |
| 2 慈眼寺の歴代住職と住職墓の展開 | 22 |
| 3 調査のまとめ | 31 |
| <引用・参考文献> | 32 |
| <抄　　録> | 卷末 |

図版目次

図面図版

- 図版1 慈眼寺歴代住職墓跡 位置と周辺の地形
図版2 慈眼寺歴代住職墓跡 墓地配置概要図
図版3 慈眼寺歴代住職墓跡 石室平面図
図版4 慈眼寺歴代住職墓跡 佛如墓1 石室1
図版5 慈眼寺歴代住職墓跡 佛如墓2 石室2
図版6 慈眼寺歴代住職墓跡 佛如墓3 石室3
図版7 慈眼寺歴代住職墓跡 佛如墓4 墓標
図版8 慈眼寺歴代住職墓跡 秀如墓1 石室1
図版9 慈眼寺歴代住職墓跡 秀如墓2 石室2
図版10 慈眼寺歴代住職墓跡 秀如墓3 石室3
図版11 慈眼寺歴代住職墓跡 秀如墓4 墓標
図版12 慈眼寺歴代住職墓跡 佛如墓・秀如墓概要図
図版13 慈眼寺歴代住職墓跡 出土遺物1
図版14 慈眼寺歴代住職墓跡 出土遺物2

写真図版

- 図版15 佛如墓 I a. 石室 b. 五鉢杵出土状況
図版16 秀如墓 I a. 石室 b. 五鉢杵出土状況
図版17 歴代住職墓群1
a. I～III地点から改葬された住職墓
b. IV地点の住職墓
図版18 歴代住職墓群2
a～e. 改装前の各地点（吉川清司氏撮影）
図版19 歴代住職墓群3
a・b. I地点の基底部と石室
図版20 調査
a. 発掘準備 b. 遺構発掘
c. 石室A発掘 d. 石室B発掘
e. 断面図作成 f. 石室実測
g. 墓標調査 h. 調査スタッフ
図版21 佛如墓2
a～c. 墓標I-17正面・側面・背面
図版22 佛如墓3
a. 墓標I-17移転後
b. 石室A蓋石除去後
図版23 佛如墓4
a. 石室A土層断面
b. 石室A東半遺物出土状況
c. 石室A西半遺物出土状況
図版24 佛如墓5 a～e. 石室A壁面・底面
図版25 秀如墓2 a～c. 墓標I-16正面・側面
図版26 秀如墓3
a. 墓標I-16移転後

- b. 石室A蓋石除去後
図版27 秀如墓4
a. 石室B土層断面
b. 石室B南半遺物出土状況
c. 石室B北半遺物出土状況
図版28 秀如墓5 a～e. 石室B壁面・底面
図版29 慈眼寺の石造物
a～c. 参道周辺 d. 境内
e～h. 墓地
図版30 出土遺物1
図版31 出土遺物2
図版32 住職墓跡地
a. I地点 b. 佛如墓 c. 秀如墓
d. II地点 e. III地点

挿図目次

- 第1図 柏崎平野の地形分類と慈眼寺の位置／3
第2図 慈眼寺周辺の地形／3
第3図 谷根地区の遺跡分布図／5
第4図 慈眼寺歴代住職墓跡I地点における墓標等配置模式図／10
第5図 慈眼寺歴代住職墓跡I地点使用石材分類図／13
第6図 深井一四氏作製慈眼寺歴代住職墓跡墓標調査図
／16
第7図 墓標のおもな形態／16
第8図 金剛杵部位名称図／17
第9図 慈眼寺佛如墓・秀如墓木棺想定図／21
第10図 慈眼寺歴代住職墓跡墓標配置模式図／27
第11図 江戸市中および周辺の墓標分類図／27

挿表目次

- 第1表 慈眼寺歴代住職墓跡関係等一覧表／23
第2表 慈眼寺関係のおもな資料一覧表（除：墓標等）
／25

挿写真目次

- 写真1 慈眼寺跡口（市指定文化財）／5
写真2 谷根城跡遠景／5
写真3 慈眼寺歴代住職墓跡調査準備／7
写真4 慈眼寺歴代住職の墓標等／29

I 調査に至る経緯

行瀧山慈眼寺は、真言宗豊山派の寺院である。柏崎市大字谷根3162・3083番地ほかに所在し、市の中心部から南西に7kmほど離れた地点にある。谷根集落は、米山北麓の盆地に広がっており、慈眼寺は集落の東端にある。集落を南から北へと貫くように谷根川が日本海へと流れているが、地形的にみると、慈眼寺は谷根川が右岸側に形成した段丘上に位置しているといえる。寺には仏教護法の天尊をあらわした十二天絵像が寺宝として伝えられている。また、現本堂入口にある額口には元禄元年（1688）銘がみられる。現在、これらは市の文化財に指定されている。

石室の発見 平成14年秋、慈眼寺では境内・墓地の3ヶ所ほどに散在していた近世から続く歴代住職の墓を境内の一角に集めて改葬するという、墓の移転工事を行っていた。その作業中、ある墓標を移動して基壇となっていた板状の礫を取り除いたところ、石組による床面および壁面で構成された方形の石室が発見された。さらに、すぐ近くの墓標の下からも同じような石組の石室が見つかった。

同年10月6日、慈眼寺の責任役員であり、改葬工事にも携わっていた深井一四氏により、石室の発見が柏崎市教育委員会（以下、「市教委」と略）へ伝えられ、確認を求められた。当時、市教委では別件の発掘調査現場作業に従事していたため、学芸員が現地に赴くことができたのは同月14日となった。

現地を確認してみると、墓標の移転そのものは終了しており、境内の移転先に墓標が集められている状態であった。しかし、石室が発見された移転元の周辺に関しては、発見段階の状態を保たせておいたとのことであった。市教委では、石室という報から、当初は経塚・古墳・その他の墳墓などといった遺構を想定していた。しかし、石室の状態や地表にあった墓標との位置関係、方向などからも推測すると、歴代住職の墓標とともに設けられた埋葬施設としての石室であると考えられた。

現地確認後、すぐに寺住職・責任役員等とともに協議を設けた。寺側からは、石室を地元の文化財として扱いたいとした上で、市教委による調査を実施してほしいと要望された。その後も協議を進めていったが、石室のある場所は墓標移転後も特に利用が計画されているわけではなく、慈眼寺側では調査後も石室を現状のままとし、何らかの形で遺構を見学できるようにしたいと考えているとのことであった。市教委では、これらの意向も汲みつつ、調査の準備をしていくこととした。そして、平成14年11月20日付けで慈眼寺住職（代表役員）五十嵐精峰氏から調査の依頼が正式になされるに至った。

調査へ向けて 市教委では、まず平成14～15年度における調査スケジュールの問題などを検討した。他の発掘調査が実施されない期間で、現地に積雪の問題がない時期に当該調査を実施する必要がある。結果的には、平成15年4月前半頃に実施する計画を立て、実際の調査方法について検討していくこととした。

平成15年3月23日に檀家の集まり（講）があり、寺責任役員・世話人会によってこれまでの経緯と調査の予定などが周知され、調査への協力が呼びかけられた。そして、遺構保存のための工夫が練られることとなった。平成15年は、2月末の段階で当該地は融雪し、地面は乾き始めていた。発掘調査を始める前に、市教委では発掘以外の諸作業を実施した。石室を覆っていた板状の礫の位置確認および図化、さらにその礫の撤去などである。これらの作業は4月初頭までに終了することができた。そして、予定していた4月8日、石室内部の発掘を開始した。

II 慈眼寺をとりまく環境

1 谷根地区的地理的環境

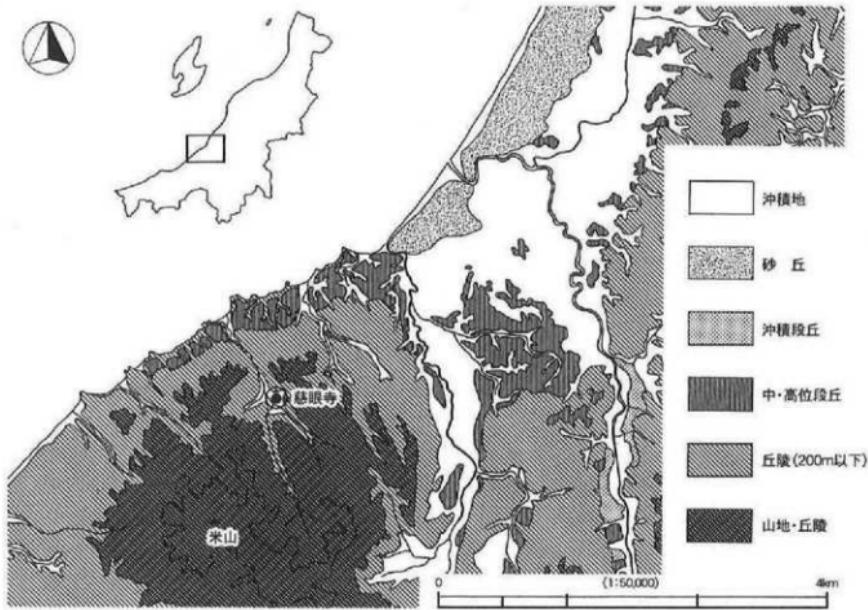
慈眼寺が所在する谷根地区は、柏崎平野の北西部に位置している。本節では、はじめに柏崎平野の地形を概観し、次に谷根地区的地形について簡単にまとめてみたい。

柏崎平野概観 県都新潟市から75kmほど南西の日本海沿いにある柏崎市は、行政的な地域区分では中越地方に属する。中越の地形は、信濃川上流域や魚野川流域一帯を占める魚沼郡域（南部）と、長岡市周辺の信濃川中流域から柏崎平野（北部）に大別できるので、柏崎平野は中越の北部でも西半部といえる。

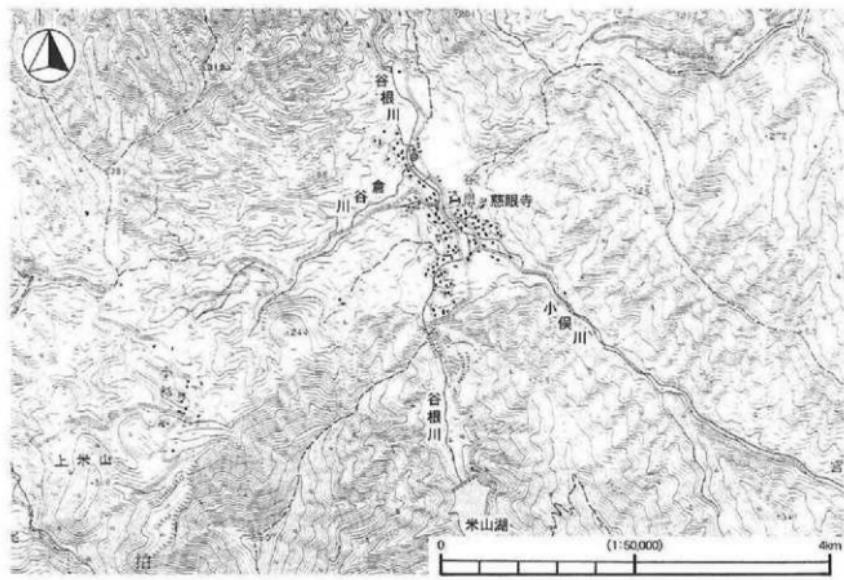
柏崎平野は、個々に独立した水系をもつ鯖石川と鵜川を主要河川として形成された臨海沖積平野である。また、周囲は東頸城丘陵に囲まれており、全国でも有数規模の河川である信濃川水系や関川水系とは分水嶺で画された独立平野といえる。丘陵地形は、北流する2河川によって、西部・中部・東部に3分され、それぞれ米山（993m）・黒姫山（刈羽黒姫山 890m）・八石山（518m）の刈羽三山を頂点とする。東部は、北東方向の背斜軸に沿って、西山丘陵・曾地丘陵・八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川・長鳥川といった鯖石川の支流が南西に流れ出る。中部は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げて広い中位段丘を形成するとともに、その北側には湿地性の強い沖積地が広がる。沖積地の北西正面は日本海に洗われ、海岸に沿って荒浜・柏崎砂丘が横たわる。東部を含め、柏崎平野の沖積地は砂丘後背地として湿地性が強く、鵜川・鯖石川の蛇行により、各所に幾筋もの自然堤防を形成させている。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊であり、現在も隆起を続けているとされている。これら山塊・丘陵地形の広がりは海岸にまで達し、米山海岸と称される国定公園の景勝地を形成する。米山海岸の景観は、沿岸部に低位・中位・高位の各段丘による断崖が顕著で、沖積地は少ない。海辺は漂石海岸で、砂浜もほとんどみられない特徴がある。

谷根地区的地形 谷根地区は、柏崎平野の丘陵地形による3区分の西部に含まれる。西部で最大の河川は谷根川で、その東側にある鯨波・川内地区の前川がこれに次ぐ。谷根川は、海岸から約3km付近の谷根盆地で小河川が集約され、北西の青海川地区へ流れ、日本海へと注がれる。現在は盆地から約1km上流に谷根ダム、そのさらに上流に赤岩ダムが造成されている。米山湖は谷根ダムに伴う人造湖であり、米山の登山口にある。なお、米山にはかつて安山岩を大量に噴出した激しい火山活動があった。この影響により、谷根地区からも安山岩系の礫が多く産出される。

慈眼寺を含む谷根集落が展開するのは、谷根川中流域に形成された谷根盆地である。「谷根」の地名は、谷の根元であることに由来するともいわれているように【竹内編1989】、周囲を丘陵に囲まれた小規模な盆地である。盆地内の南側で、北流する谷根川に対し、右岸で南東から北西へ流れる小俣川、左岸で西から東へ流れる倉谷川が合流する。他にも小河川があり、盆地の西側には扇状地状の地形がみられるので、沖積地の形状は「大」の字に似る。沖積地中心部の平坦地はおおむね東西約400m、南北約1,100mであり、その範囲に現集落域が広がる。慈眼寺は盆地の東部、小俣川右岸の段丘上に位置する。沖積地から1段目の段丘面に本堂・境内があり、その背後となる2段目の段丘崖に墓地が形成されている。



第1図 柏崎平野の地形分類と慈眼寺の位置



第2図 慈眼寺周辺の地形

2 谷根地区的歴史的環境

谷根地区は、考古資料・文献資料などの歴史資料が限られている地域である。しかし、1971年には吉川松蔵氏が谷根の歴史をまとめた『谷根史誌』を著している〔吉川1971〕。また、1970年代以降、谷根ダム建設をはじめとする水道事業を通じ、月橋 奎氏は谷根の自然や歴史の調査報告を編纂した〔大竹1973・久我1973・笛川ほか1978〕。本節では、これらの成果や所在する遺跡なども含めて谷根の歴史的環境を概観し、慈眼寺の歴史についても簡単に触れておきたい。

1) 谷根の歴史的環境概観

資料数の関係から、各時代についての詳細な記述はできないが、古代以前・中世そして近世に区分して述べる。

古代以前 谷根地区における過去の生業の痕跡として、今のところ最古と考えられるのは、狐塚遺跡（4）である。谷根川左岸の段丘上、東向緩斜面にある縄文時代の遺跡である。ガラス質安山岩製の打製石斧、蛇紋岩製の磨製石斧が採集されている〔岡本1987〕。

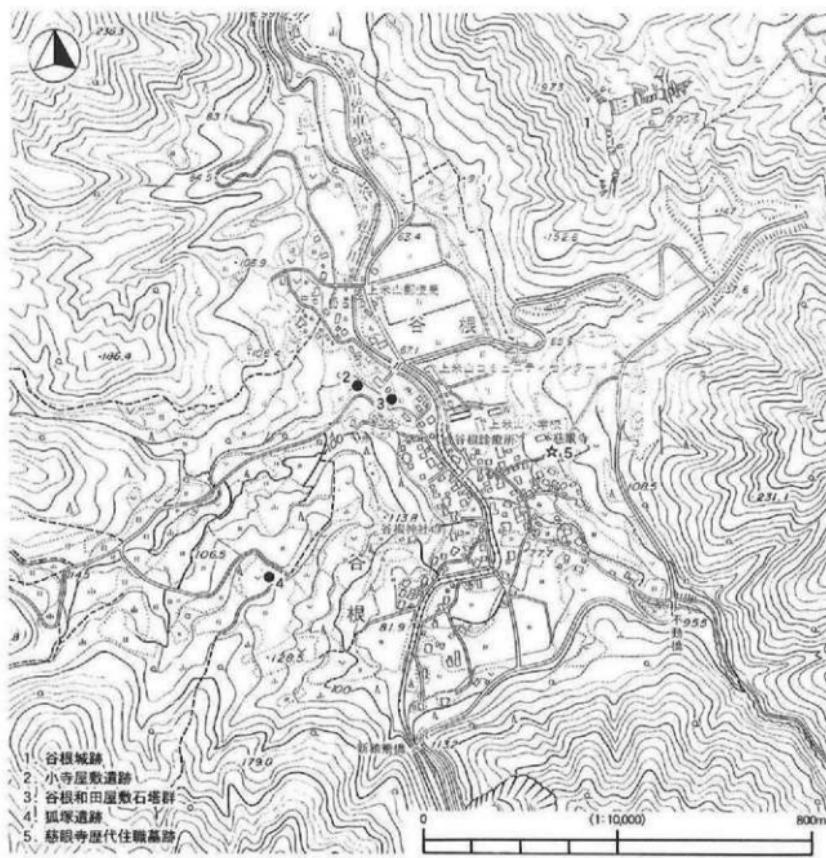
そのほか、谷根地区では古代に至るまでの時期に属す遺跡は確認されていない。しかし、海岸に面した谷根川下流域の青海川地区では、ダルマ岩製塩遺跡と倉谷遺跡という2つの古代遺跡が知られている。前者は入江状の海岸急斜面に営まれた製塩遺跡〔品田1989〕、後者は浜斜面を利用した製鉄遺跡〔品田1993〕と考えられ、いずれも古代の手工業系の遺跡であったと推測される〔品田1994〕。

中世 谷根川左岸の小寺屋敷遺跡（2）では、中世陶器、特に珠洲の破片が採集されており、廃寺跡といわれている〔宇佐美ほか1987〕。また、谷根城跡（1）は、集落北東側の尾根上に構えられた山城である。尾根頂部の標高は約250m、直下の沖積地との比高差は150mほどである。T字状の地形を利用して、東西・南北ともに約250mの範囲に空堀を中心とした遺構が配される〔植木1987〕。

なお、谷根地区の南西、小杉を隔てた吉尾の法興寺（日蓮宗）では、中世の紀年銘を持つ鰐口（市指定文化財）がのこされている。銘帯の上部中央には「米山」、右側には「海福山法興寺常住」、左側には「永正十六年（1519）己卯十月十三日」とある。「海福山」とは、法興寺が日蓮宗に改宗する以前の山号である。

近世 確実に谷根が文献資料に登場するのは近世になってからである¹⁾。近世では谷根村となり、頸城郡に属した。谷根の支配者は、1598～1607年は春日山藩（堀氏）領、1607～10年は福島藩（堀氏）領、1610～14年は福島藩（松平氏）領、1614～16年は高田藩（松平氏）領、1616～18年は長峰藩（牧野氏）領、1618～24年は高田藩（松平氏）領、1624～81年は高田藩（松平氏）領、1681～85年は幕府領、1685～1701年は高田藩（稲葉氏）領、1701～10年は高田藩（戸田氏）領、1710～41年は高田藩（松平氏）領、1741年は高田藩（柳原氏）領となり、幕末に至る。おもに高田藩など、上越地方の領主による支配が続いている。

17世紀では領主の交替が多いが、これは高田藩主の改易・転封が度重なったためである。1710年、桑名藩主であった松平定重（越中守）が高田藩主になると、その後は白河藩、そして桑名藩への移封があったものの、柏崎市域の大半は松平越中守家による支配が幕末まで続く。しかし、谷根周辺の領主は異なっている。1741年に高田藩主松平定賢（越中守）が白河藩に移封されると、かわって姫路藩主であった柳原政永が高田藩主となった。松平氏の移封に伴い、大半の柏崎市域は白河藩領→桑名藩領となったが、谷根周辺は引き続き高田藩領であり、以後は長く柳原氏の支配となって明治維新を迎えている。



第3図 谷根地区の遺跡分布図



写真1 慈眼寺銅口（市指定文化財）



写真2 谷根城跡遺景

柏崎市域にあった近世村落の状況は、白河藩主であった松平定信（越中守）の命で19世紀初頭に編纂された『白川風土記』〔柏崎市立図書館編1977〕に詳しいが、谷根周辺は白河藩領ではなかったため、記載がない。ただし、享保7年（1722）4月、高田藩（松平越中守）領時代に作成された「鉢崎組村鑑帳」²⁾からおおよその状況をみることができる。これには、柿崎村・川井村・行法村・山谷村・岸海村・谷内村・金谷村・法音寺村（以上、柿崎町）・大清水村・鉢崎村・上輪村・上輪新田村・笠嶋村・青海川村・谷根村（以上、柏崎市）が記載され、この15村が鉢崎組村と総称されて支配されていたことがわかる。谷根村の石高は約236石余、新田が約38石余³⁾、家数は95軒、人數568人（僧3人・男292人・女273人）、牛53疋を数える。また、藩領の境界などに設置される口番所が以前からあった。当地は米山街道にあたり、360人が勤めていたという。なお、「御除地」として慈眼寺・源訪大明神・胞衣姫大明神の寺社がみられる。

また、谷根は石造物の種類や数量が比較的豊富な地域であることが知られている。特に、谷根和田屋敷石塔群（3）では、五輪塔・宝篋印塔・石仏などが多く集中している〔金子1987〕。石造物の紀年銘は、18世紀後葉～19世紀が中心である〔渡辺1991〕。なお、付近には14世紀の楠木氏の支族和田氏に関わる伝承があり、周辺には「かぐら屋敷」「小寺屋敷」といった地名がみられる〔吉川1971〕。

近代になると、明治12年（1879）には中頭城郡谷根村、明治22年（1889）には同郡上米山村大字谷根、昭和25年（1960）には柏崎市大字谷根となり、現在に至る。

2) 慈眼寺略史

慈眼寺の歴史を示す記録類としては、19世紀後葉の「新潟県神社寺院仏堂明細帳」に「慈眼寺 新潟県管下越後国中頃郡谷根村字向山 真言宗、本尊正觀世音 開山年月日不詳、中興果精法印格衣、延宝七己未年（1679）十一月廿八日没ス、当代迄十四世」とあるが〔根立ほか1990〕、過去帳などの記録類は本堂の火災によって多くが失われたといわれており、詳細な歴史は明らかではない。

『谷根史誌』によれば、慈眼寺は天正年間（1580年）に金山城主青海川下総守の菩提寺として建立されたといわれる。青海川氏が上杉景勝の会津移封に従うと、寺は無住になったが、鷲尾山不動院（市内宮之宿）の別院である不動庵の檀家が移って再興された。その後、不動庵は不動院との取定めで慈眼寺が管理することとなり、庵寺はそのまま残されて葬祭供養が行われたという。慈眼寺は寛永13年（1636）に再建されたとあるが、不動庵との関係は明らかではない。「新潟県神社寺院仏堂明細帳」記載の果精は再建の43年後に没しているが、「中興」とあるため、再建に関わった住職であった可能性がある。

さらに、『谷根史誌』では、慈眼寺は3回の火災に遭ったとしている。そのひとつは元禄年間の焼失である。寺に伝わる鰐口（市指定文化財）には「元禄元戊辰（1688）三月廿一日」との銘文があるので、焼失を免れたものと思われる。また、2回目の火災については、享保8年（1723）に再建されたとある。そして、昭和15年（1940）には山門と土蔵以外が全焼した。ただちに庫裏は再建されたが、本堂は建てず、庫裏と同じ棟に連続して設けられ、今日に至っている。

註 1) 桜井氏所蔵文書には、天正8年（1580）7月26日、上杉景勝が宇野民部少輔に所領を充行ったという記事がある。『上杉家御年譜』では、その所領について「一 谷根／一 三条給人前地方」と解しているので〔米沢温故会1977〕。本文書が谷根に関わる初出史料とする見解もある。しかし、『新潟県史』などでは「谷根」ではなく、「善根」としており〔新潟県1984〕、ここでは明確にできない。なお、善根は鷲石川中流域の柏崎市大字善根に比定される。

2) 『柏崎市史資料集』近世編2第6項一〔柏崎市史編さん委員会1985〕所収。

3) 谷根村の石高は、「正保国絵図」（1645年）では189石余、「天和検地帳」（1683年）では203石余、「天保郷帳」では306石余となっている。

III 調 査

1 調査の方法

今回の調査で対象となった石室は、調査終了後は現況のままとし、慈眼寺側の手によって見学も可能なよう蓋掛けをして保存する計画がなされていた。そのため、実際に発掘を実施できるのは、石室内部に堆積した覆土のみとなる。しかし、石室に伴う墓標も判明していることから、当該石室を理解する上では、墓標の調査も必要と判断された。したがって、今回は発見された石室のみならず、墓標についても調査を実施することとした。また、完掘した石室と墓標は、測量作業を業者に委託した。石室の発掘後、測量作業中は、墓標の調査に取り掛かることとした。

なお、発掘調査の対象となった2基の住職墓は、墓標の銘文から被葬者が佛如と秀如であることがわかるので、各々を「佛如墓」・「秀如墓」と呼称することとした。また、現場作業・整理作業において、石室は「石室A」・「石室B」、墓標は「墓標I-16」・「墓標I-17」と称していたが、本報告書においてもこの名称を用いる場合がある。佛如墓は石室A・墓標I-17、秀如墓は石室B・墓標I-16からなる²⁾。

2 調査の経過

発掘調査現場作業は、平成15年4月8日～18日までの延8日間にわたって実施した。内部が1辺約70～90cmの石室2基の発掘であるため、調査面積は約1.2m²である。また、原則として、調査担当を含む調査員4名が発掘に携っており、期間中は延31名が作業を行った。

調査準備 平成15年は、すでに2月の段階で比較的穢やかな気候となっていた。3月には慈眼寺周辺においても雪解け水はさほど多くなく、地面はおおむね乾いた状態の日が多くみられていた。そのため、4月に予定した発掘調査に向けて、3月後半段階から事前の諸準備等を行うことができた。

石室が発見された10月以降、2基とも蓋石は付近に移動された状態であった。まずは蓋石があった状態を確認する必要があった。3月24日、蓋石を元の状態に復元する作業を慈眼寺側によって執り行われた（写真3左）。27日は簡単な清掃作業を行い（図版20-a）、蓋石が復元された状態を撮影、そして平面図



写真3 慈眼寺歴代住職墓跡調査準備

を作成した。石室の周辺には他の墓標や樹木が多いいため、日が傾く時間帯には、それらの影が石室に及ぶといった影響がみられた。そのため、撮影は影の短い昼頃を予定した。以後も撮影にあたっては、これらのこととを念頭において作業を行った。その後、4月1日には発掘のために再び寺側の手によって蓋石を除去してもらった。石室の発見以来、現場には板やシートなどによる簡単な蓋掛けがなされていたが、やはり石室内部には周辺から流れ込んだ土砂や落ち葉などがみられた。翌2日、移転された墓標などを撮影し、3~4日には墓標の拓本をとり始めた。風などがあつて作業はやや難航した。

石室内発掘 4月8日、予定どおり発掘作業を開始した。開始に先立ち、調査員・寺役員等関係者が集まる中、住職によるお祈りの読経が始められた(写真3右)。次に、市教委側・慈眼寺側から挨拶があり、調査担当から調査の方法などの説明をした。その後、早速発掘に着手する。ただし、降雨が懸念されたことから、本日は石室Aのみを着手することとした。

まず、西半に幅30cmのサブトレーンチを発掘したが、覆土はおおむね上層と下層に分類できた。上層は、周辺から流れ込んだ土砂と考えられた。しかし、深度約20cm以下の下層になると、金属片や木片が出土するようになつた。金属片は鈴の腐食が激しかつたが、蝶番および鍵であると考えられた。これらの遺物はいずれも木棺に関わるものと推測された。引き続き発掘を進め、10日には半蔵が終了したので、断面の観察・撮影・作図を行つた(図版20-e)。その間、石室Bの半蔵にも北半から着手した。同様に上層は流れ込んだ土砂と思われるが、石室Aに比べると上層は薄く、蓋石の密閉度の高さがうかがわれた。石室内は狭いため、作業は難航したが、北半における出土遺物の分布図を作成した。また、この日のうちに断面の観察・撮影・作図もできた。なお、断面の下層部分から金属製仏具の一部が顔を出したが、この段階では五鉢杵・五鉢鉢の判別はできなかつた。なお、覆土はすべてフレイにかけ、細かな遺物も回収できるようにした(図版20-b)。

完掘と墓標調査 翌11日は、石室A・Bとも完掘に取り掛かる(図版20-c・d)。週明けの14日、完掘が進む中で、石室Bの仏具は五鉢杵とわかつたが、今度は石室Aにおいても五鉢杵が出土した。さらに、石室Aでは蝶番、Bでは寛永通寶が出土した。これらについても、出土状況がわかるよう、撮影・作図をした。翌15日までに遺物を取り上げて完掘し、石室の壁面・床面を清掃した。

16日、委託業者により石室の写真測量を始める(図版20-f)。その間、調査員において石室に関わる作業はないため、墓標の調査に取り掛かった。墓標にみられる文字の判読作業を行い、梵字についても確認していく(図版20-g)。墓標についての作業は、おおむね終了することができた。

17日、石室の完掘写真を撮影すべく、清掃作業を行う。蝶の清掃が作業の中心となつたが、業者による写真測量の痕跡もさほど残つていなかつた。水洗いした部分もなんとか乾燥させ、撮影は影の短い正午前後に予定どおり行うことができた。その後は、エレベーション図を作成する。また、石室を構成する蝶の石材を鑑定したところ、おおむね3種類の石材がみられ、石室AとBあるいは石室の上半と下半とでは用いられている石材が異なつてゐることがわかつた。翌18日は、石室・墓標において若干の補足作業を行い、現場作業で用いた器材等を撤収した。以上で、現場作業は終了である。

現場作業終了後 その後は整理作業を行う。出土した金属製品・木製品類については、簡易的な保存処理等も実施した。また、8月3日に慈眼寺では孟蘭盆会が行われた。地元を中心とした檀家が集まるこの機会を利用し、調査報告書が催された。役員はじめ72人ほどが集まつたが、地元住民の関心の高さがうかがえた。その後、平成16年3月までに報告書作成作業を進めていった。

註) 墓標の番号については、深井一四氏の記録(第6回)に基づいている。詳細は、第IV章第1節を参照されたい。

IV 住職墓 - 墓標と石室 -

1 住職墓の配置

1) 慈眼寺の立地と現況

慈眼寺は、谷根盆地の東部に位置する。谷根盆地は、北流して日本海へ出る谷根川が小俣川や他の小河川を合流させる地点である。慈眼寺が立地するのは、谷根川・小俣川右岸に形成された段丘上である。また、盆地東側の沢にも近く、すぐ北側は沢の南側斜面と接している。

慈眼寺は、沖積地から1段目の段丘面に本堂や境内が設けられている。本堂の裏手の斜面は段丘崖であり、墓地が広がっている。境内の標高は約90mを測り、墓地は92~95m付近にある。さらに、1段目の段丘面北側の突端部にも、本堂・境内からはやや距離をおくが、もう1ヶ所の墓地が営まれている。檀家(地元)からは、段丘崖の墓地を「カミラントウ(上卵塔)」、北側突端部の墓地を「シモラントウ(下卵塔)」と呼ばれている。

今回の調査を実施する契機となった歴代住職墓の改修とは、カミラントウや境内周辺の3ヶ所に散在していた住職墓や石塔類を現本堂の南側に移設し、一括するものである。移設先は1940年に焼失した本堂があった地点で、山門を通過すると、おおむねその正面にあたる。

2) 改修以前における住職墓の配置

現存する歴代住職墓は、おもに境内やカミラントウ付近の4地点に散在していた。しかし、調査員が初めて現地を訪れた段階(平成14年10月14日)では、すでに墓標は当初の位置を離れていた状態であった。そのため、改修以前の住職墓等の配置については、深井一四氏による記録や吉川清司氏が撮影した写真など¹⁾をもとに概要を述べておきたい。

記載にあたっては、各地点の名称として便宜的にI~IVのローマ数字を用い、「I地点」などとする。墓標等には、深井氏が付した番号を踏襲し、算用数字にて表す。そして、個々の墓標等を示す際には、「I-1」などと表現することとする。今回調査した住職墓は、2基ともI地点にあったものである。そのため、ここではI地点の概要をまとめることとする。II~IV地点については、I地点とともに改めて第VI章第2節で触ることとしたい。

I 地点の概要 カミラントウは、段丘崖の斜面を削平して階段状に形成された墓地である。I地点は、カミラントウの東側にあたる最も高い段のほぼ中央に位置し、周辺には一般の檀家の墓標が並ぶ。他と同様に、多くが段の上手側(東側)を背にして置かれ、下手側(西側)を向く。下手側には何も置かれず、通路となっている。幅約6.4mの範囲が1段高くなっている。段の縁辺には石組がめぐる。石組は、北側約2mの部分が1.2mほど西側(前)へ張り出している。おおむね立方体に近い形状の礫が用いられ、張り出し部分では1段、他は2段積となっている。

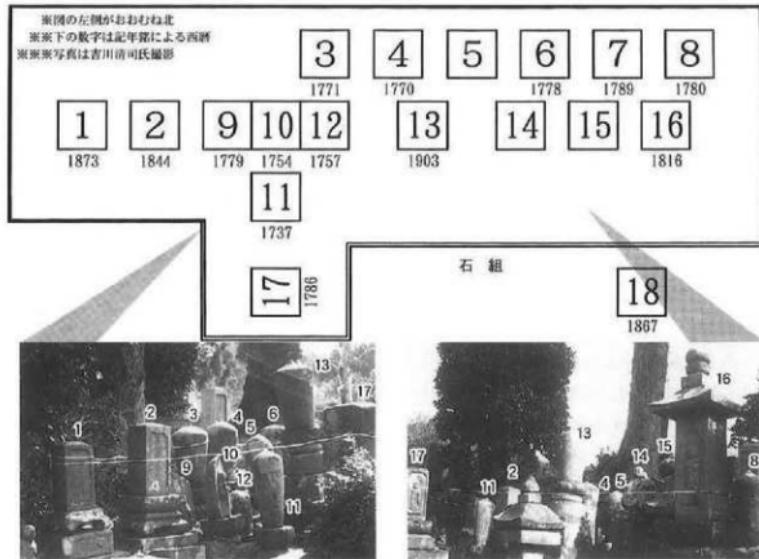
I地点には18基の墓標等があり、I~IV地点の中では最多である。墓標等は、おおむね前後2列と前列から突出した佛如墓(17)という配置である。北端には柱状型が2基(1・2)あり、光背型2基(9・

10) と無縫塔 2 基 (11・12) が互いに近接して立ち、前列となる。その南側（右側）にも無縫塔が 1 基 (13) あるが、基礎・基壇が高い。さらに南側（右側）の丸彫り型 (14)・五輪塔 (15) とも幾分離れた位置にあるため、周囲からは独立した感がある。規模の大きい笠付型の秀如墓 (16) は、五輪塔の南隣（右隣）で、前列南端（右端）にある。後列には、無縫塔 6 基 (3～8) が並んでいる。そして、9～12 の前面、つまり西側の張り出し部分には柱状型の佛如墓 (17) がある。さらに、石組の外ではあるが、秀如墓のほぼ正面には石灯籠 (18)³⁾ が立っていた³⁾。

墓標と石室の対応関係 すでに述べているように、I 地点において発見された石室は 2 基（石室 A・B）である。最後に、発見者の言や改葬以前に撮影された写真（図版 18-a・b）などを手掛かりに、墓標と石室との対応について確認しておきたい。

石室 A は、墓標 I-17 の直下にあったと証言されている。改葬において、墓標 I-17 の基壇（現存しない）を移動させたところ、さらに板状の石が発見された。その石を除去すると、下は石室となっていたといふ。これが石室 A である。墓標 I-17 の位置は、I 地点の中でも唯一西側（斜面下方）の通路へ張り出し、南側を向いているが、石室 A の位置はそれに対応している。また、主軸も I 地点における他の墓標の列におおむね平行しているので、石室 A は墓標 I-17 に対応するものと考えられる。

石室 B は、墓標 I-16 の直下にあったと証言されている。同じく改葬において墓標 I-16 の基壇（現存しない）を移動させたところ、角材状に加工された石材が 3 基、並べて置かれていた。中央の石材から移動させてみると、下が石室になっていることがわかったといふ。石室 B は I 地点の南端にあり、一般的の檀家の墓と近接した位置にある。基礎・基壇の位置からも、墓標 I-16 もおおむね石室の直上にあったと推測される。また、石室の主軸は墓標の向きなどとあまりずれていない。したがって、石室 B は墓標 I-16 に対応するものと考えられる。



第 4 図 慈眼寺歴代住職墓跡 I 地点における墓標等配置模式図

2 佛如墓・秀如墓の墓標と石室

本節では、調査の対象となった2基の住職墓について概要を報告する。記載としては、まず地上に設けられた墓標（上部構造）に触れ、次に発掘調査した石室（下部構造）について説明する。墓標の説明にあたっては、庚申懇話会編『日本石仏事典』（第二版）[1996] や日本石仏協会編『石仏巡り入門—見方・愉しみ方』[1997]などを参考にした。また、石室については、形態・規模・覆土・遺物の出土状況といった観点でまとめる。

1) 佛如墓

佛如墓は、上部構造が墓標I-17、下部構造が石室Aで構成されている。

a 墓 標（墓標I-17 図版7・21）

本墓標は、凝灰岩製で、墓標本体となる塔身および台座・基礎からなる。改葬後の実測では、高さ100.8cmを測った。しかし、改装前の写真（図版18-a）をみると、さらに下に基壇が1段あった。この基壇はすでに実見できる状態にはないが、同じ写真から高さ22cm前後、幅80cm前後と推測されるので、当初の墓標は約123cmの高さであったと考えられる。

墓標の形態は柱状型である。正面・側面・背面の4面が平坦な四角柱であり、頭部も平坦面となっているが、側面との境は丸みを帯びているので、正面からみた形状は隅丸を呈している。したがって、全体的な形態からは角柱型、頭部の形態からは丸角型に細分できる。塔身の高さ68.5cm、正面・背面の幅は30.7cm、側面の幅は20.5cmを測る。

正面には、方形であるが、上2隅が内側へ入り込む形状の扇子枠が設けられている。左右の枠の幅は3.1cm、上の幅は5.5cm、下の幅は5.6cmである。1cmほど彫り込まれたその内部には、仏像を表現した像容がみられる。仏像は丸彫りの立像で、彫り込まれた舟形光背を伴う。剃髪頭（円頭）で法衣（納衣）をまとった法師（比丘）の姿、すなわち声聞形（比丘形）であり、右手に錫杖を抱え、左手に宝珠をのせる。このような容姿の特徴から、仏像は地蔵菩薩と考えられる⁴。また、仏像は丸彫りされた台座・基礎の上に立つ。台座は、上半に請花（蓮華座）が表現されているが、反花はない。基礎の形態は方形である。仏像本体は高さ（丈）33.8cm、幅13.0cmであり、舟形光背は高さ43.0cm、最大幅19.4cm、下端幅11.2cm、奥行最大2.4cmほどが彫り込まれている。台座は幅13.3cm、高さ3.9cm、基礎は幅16.3cm、高さ3.5cmである。したがって、像容全体の高さは50.4cmである。像容は頭部が角柱の面よりも突出しており、単なる角柱に対して像容が彫られたものではないことがわかる。

左右の側面には、陰刻による文字がみられる。右側面には、梵字「ア」（大日如來）を冒頭に、「傳燈大阿闍梨佛如大和尚」、左側面には、「天明六丙午五月十二日」とそれぞれ楷書で縦書きされている。被葬者である佛如、没した天明6年（1786）5月12日を示している。背面も平坦に加工されているが、平滑ではなく、像容・文字などはみられない。

台座は、24葉の蓮弁状を呈した請花と16葉の反花がそれぞれ上半と下半に表現されている。請花は幅46.3cm、奥行35.3cm、高さ15.0cm、反花は幅46.5cm、奥行35.7cm、高さ6.6cmなので、高さは計21.6cmである。基礎の形態は方形で、幅46.2cm、高さ10.3cmである。

状態は比較的良好であり、一部に若干の風化が認められる程度である。

b 石室（石室A 図版4～6・15・22～24）

本石室は、I地点の石組（基底部）の北端、西側へ約1.2m張り出した部分に位置する。

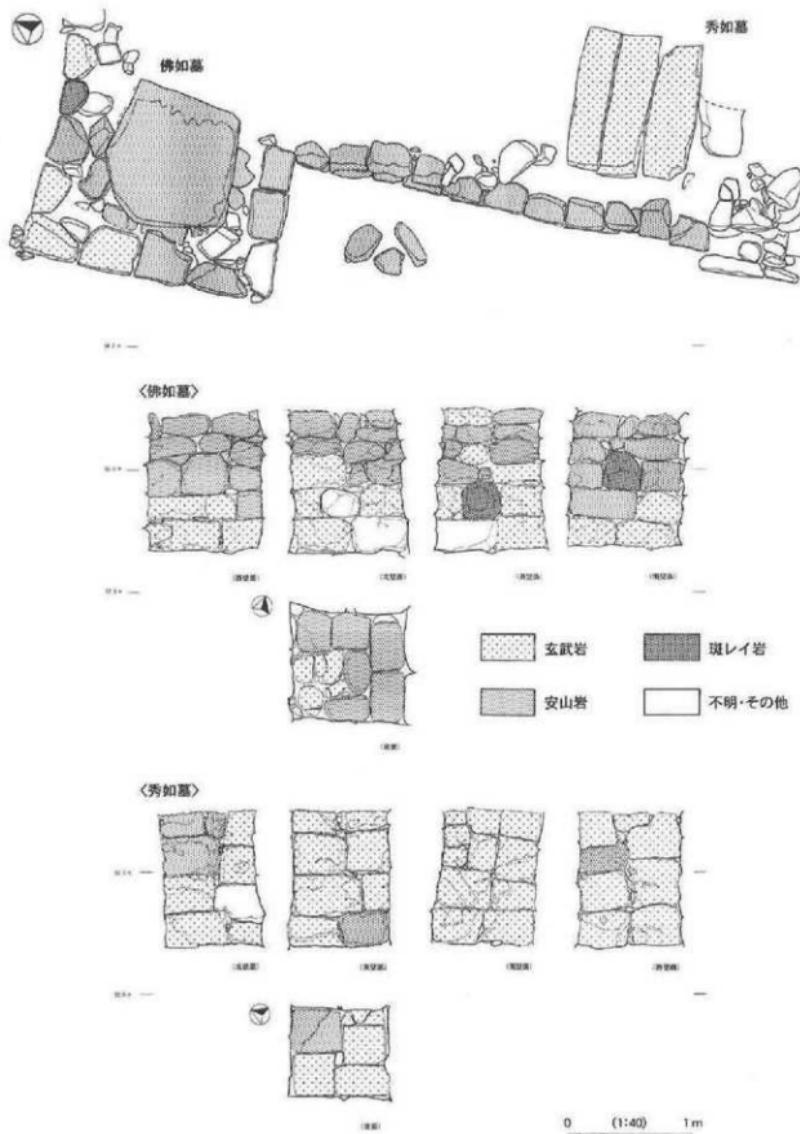
形態・規模 石室の形態は直方体であり、直上には1辺1.0～1.1m、厚さ約20cmの蓋石を伴い、その上に墓標の基壇がのっていた。石室の規模（内寸）は、東西約0.8～0.9m×南北約0.7～0.8m、蓋石からの深度は約1.1m（約0.7m）を測る。壁面は、5～6段に組まれた礎で構成されており、一部に自然面を表面にしているものもあるが、大半は切出しの痕跡を残した切断面を壁の表面として用いている。また、壁の上半と下半とでは、礎の組み方が異なっている。上3～4段では、切断面が縦10～20cm×横30～40cmほどの略長方形もしくは不整楕円形の安山岩で組まれており、隙間にはそれよりも小さな安山岩を充填している。これに対し、下2段では切断面が縦20～30cm×横30～50cmの長方形あるいは縦20～30cm×横20～30cmほどの略正方形の玄武岩を利用しており、隙間は上半よりも小さい。底面は、北辺・東辺には30～40cmの方形を呈した安山岩、南西部分には20cm前後の不揃いの玄武岩で形成されている。

石室の周囲では、東辺（段丘側）を欠いた「コ」の字状の石組がめぐって基底部を形成している。北辺約2.0m、西辺約2.1mであり、南辺は約1.2mで南側にある南北に走る石組と直角に接続する。これらから、本墓跡の基底部となった石組全体としては、1辺2.0～2.1mの正方形が意図されていたと思われる。礎は、1辺40～50cmあるいは30cm前後の略立方体あるいは不整直方体に切り出された安山岩・玄武岩・斑レイ岩などで構成される。ただし、調査前に若干の移動があったとのことである。基底部の位置は復元されているが、各々の礎の原位置については、慎重を期したい。

覆土 内部には約40cmの土砂が堆積していた。おもに上層・中層・下層に分類できる。上層（第2層）は、黒褐色粘質土層で、粘性はややあるが、締まりがない。腐葉土などを多く含んでおり、礎の隙間などから流入した土砂である可能性が高い。また、第2層上面からの落ち込みが確認されたが、全般的に締まりがなく、腐葉土や草木の根などが多くみられた（第1層）。墓標を移転した段階（2002年11月）で、石室内には木の葉などが多く入り込んでおり、移転に伴った何らかの作業があったため、上層はそれらによつて形成された可能性がある。

中層（第3層）は、暗灰褐色粘質土層である。粘性があり、締まりはややない。腐植した木片や金属製品がややみられるが、そのために赤色化した部分がある。下層（第4層）は、（灰）褐色粘質土層である。粘性があり、締まりはややない。中層よりも木片や金属製品が多いためか、赤色化した部分が多い。下層は、層厚が15～20cmで南側（正面側）がやや厚くなっている。仏具をはじめとする木質・金属質の遺物はおおむね下層から出土している。遺骨などの遺物の大半は、石室によって遮断されているとはいえ、200年の間に周囲の酸性土壤によって分解が進み、土壤化されたと考えられる。下層は、埋葬段階から石室内にあった土砂と腐朽（分解）によって生じた土砂とで形成されたと考えられる。中層も埋葬段階からあった土砂であるが、腐朽によって生じた土砂をあまり含んではない部分と思われる。

遺物出土状況 すでに述べたように、五鉗杵・蝶番・釘などの出土遺物の大半は底面付近の下層（第4層）から出土している。まず、五鉗杵は石室中央の北辺より出土した。その周辺には数点の釘が散見された。蝶番は4点出土しているが、南東隅とそのやや北西側、南西隅とそのやや北側でそれぞれ1点ずつ検出されている。蝶番や釘には木片が付着していることからも、木製容器すなわち木棺の接合具であったことがわかる。そして、蝶番の存在から、木棺には観音開きのように開閉する部分があったと考えられる。さらに、五鉗杵は、腐朽した木棺・遺体などの崩落を加味したとしても、木棺内で遺体のほぼ中央近くに携えられていたことが出土位置から想定される。



第5図 慈眼寺歴代住職墓跡1地点使用石材分類図

2) 秀如墓

佛如墓は、上部構造が墓標I-16、下部構造が石室Bで構成されている。改葬後は中央に置かれているように、他の住職墓に比べて墓標が大きい。

a 墓 標 (墓標I-16 図版11・25)

本墓標は、安山岩質の石材を用いており、おおむね笠・塔身・台座・基礎で構成される笠付型に分類される。改葬後の実測では、高さ223cmを測った。しかし、改葬前の写真(図版18-a)をみると、石室の蓋石との間には基壇が1段あったようである。この基壇はすでに実見できる状態ではなく、復元は難しいが、現存する基礎から推測すれば、高さは15~20cmほどと思われる。したがって、当初あった墓標の高さは約240cmであったと考えられる。

笠には頂部に先端が尖る宝珠が付される。宝珠の下には請花があるが、蓮弁状ではなく、波状の沈線・隆線による簡略化された装飾である。そして、宝珠・請花の下には方形の露盤を挟んで笠本体となる。笠は四角錐状であるが、稜線の傾斜は下半になつて緩く、軒が聞くようになる。宝珠は最大幅23.1cm、高さ28.5cm、請花は幅22.8cm、高さ11.7cm、露盤は幅23.3cm、高さ11.0cm、笠本体は最大幅71.5cm、高さ24.7cmを測る。したがって、笠の高さは計75.9cmとなる。宝珠と請花、露盤、笠本体の3点は、それぞれ別作りとなっている。

塔身は、四角柱の柱状型である。高さ101.9cm、正面・背面の幅は33.9cm、側面の幅は34.6cmを測る。正面には、方形であるが、上2隅が内側へ入り込む形の扇子枠が設けられている。左右の枠の幅は3.5cm、上の幅は8.3cm、下の幅は9.8cmである。1cmほど彫り込まれたその内部には、仏像を表現した像容がみられる。仏像は丸彫りの立像で、彫り込まれた舟形光背を伴う。剃髪頭(円頭)で法衣(納衣)をまとった法師(比丘)の姿、すなわち声聞形(比丘形)であり、右手に錦杖を握り、左手に宝珠をのせる。このような容姿の特徴から、佛如墓と同様に、仏像は地蔵菩薩と考えられる。また、仏像は丸彫りされた台座・基礎の上に立つ。台座は、上半に請花(蓮華座)が表現されているが、反花はない。基礎の形態は方形である。仏像本体は高さ(丈)39.0cm、幅12.8cmであり、舟形光背は高さ59.5cm、最大幅21.6cm、下端幅15.6cm、奥行最大2.4cmほどが彫り込まれている。台座は幅17.7cm、高さ6.0cm、基礎は幅18.8cm、高さ6.6cmである。したがって、像容全体の高さは72.1cmである。やはり佛如墓と同じように、像容は頭部が角柱の面よりも若干突出している。塔身は単なる角柱が用いられたのではなく、この墓標専用に切り出されて像容が彫られたものであることがわかる。

左右の側面には、正面とほぼ同じように扇子枠があり、それぞれの内部に陰刻による文字がみられる。右側面には、梵字「ア」(大日如来)を冒頭に、「傳燈阿闍梨秀如 和尚位」、左側面には、「文化十三丙子九月二十四日春秋七十三歳ノ當寺ニ面カ寛政十二申六月九日免許ノ永代十三夜燈金二十両喜捨畢ノ在住卅三年」とすべて楷書で縦書きされている。被葬者は秀如、没したのは文化13年(1816)9月24日であつたことがわかる。背面も平坦に加工されているが、像容・文字などはみられない。

台座は、24葉の蓮弁状を呈した請花と16葉の反花がそれぞれ上半と下半に表現されている。請花は幅59.5cm、奥行59.2cm、高さ19.5cm、反花は幅61.1cm、奥行60.7cm、高8.7cmなので、高さは計28.2cmである。基礎の形態は方形で、幅60.8cm、奥行60.4cm、高さ17.0cmである。

宝珠の先端が一部欠損しているが、全体としては比較的良好な状態で遺存しており、像容や文字の模様も明瞭である。

b 石室（石室B 図版8～10・16・26～28）

本石室は、I地点の石組でつくられる基底部の南端にあり、一般の檀家の墓と接する位置にある。

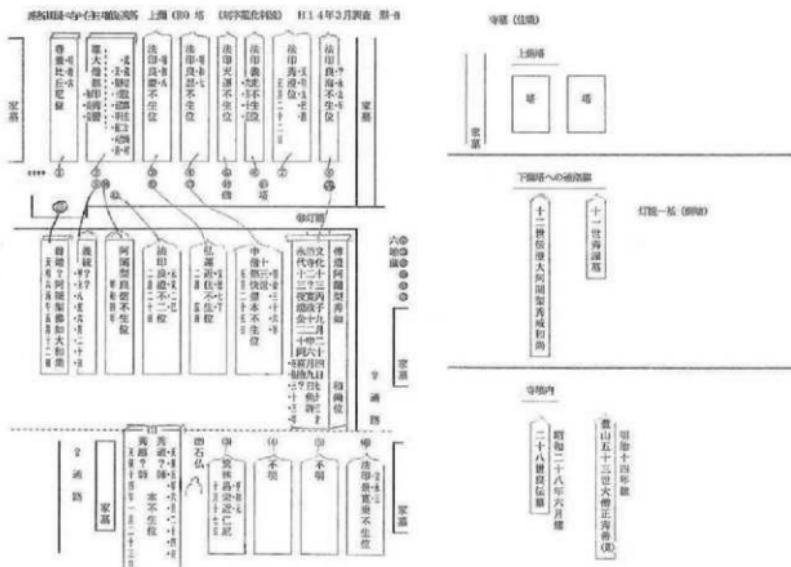
形態・規模 石室の形態は直方体であり、角柱状で3基からなる蓋石が伴う。蓋石は、長さ110～120cm、幅30～40cm、厚さ約20cmで、東西を延長方向として並べられ、石室を覆っていた。石室の規模（内寸）は、東西約0.7～0.8m×南北約0.75～0.8m、蓋石からの深度約1.1m（約0.6m）を測る。壁面はおおむね4段に積まれた礎によって形成されている。礎は、1辺30～40cmの直方体に切り出されたものがおもに用いられている。北壁面・東壁面には壁表面が長方形となっている礎がほとんどであるが、南壁面・西壁面では壁表面が正方形となっている礎が多く使われている。表面には切出し痕が明瞭に残る。積み方は耐久性が高いとされるレンガ状ではなく、上・下段の礎とは位置をずらさずにそのまま積み上げている。また、南壁面の上段東側では、約20cmと約30cmの礎とを組み合わせている。さらに、北壁面の下段東側・西壁面の上段中央では、礎と隙間との関係から礎に切断を加えて組み合せている。そして、小さな隙間には薄い礎を充てている。底面も方形の面を持つ礎と小さい礎との組み合わせで形成されている。部分的に調整されている箇所もあるが、全体として上半も下半も方形の面で壁面を形成していることから、石室Aに比べれば規格性をうかがうことができよう。なお、使用されている礎は、大半が玄武岩である。玄武岩以外では、北壁面の上段西側と底面の北東側で安山岩、北壁面の中段東側で流紋岩と思われる石材、そして東壁面の下段南側と西壁面の中段南側で安山岩と流紋岩との中间的な石材が用いられている。

基底部は石室Aの南側から続く石組である。30～40cmの略立方体に切出された礎が2段に積まれ、高さ約0.5mの壁となって通路とを隔てている。石材は、一部に玄武岩を含むが、ほとんどが安山岩である。

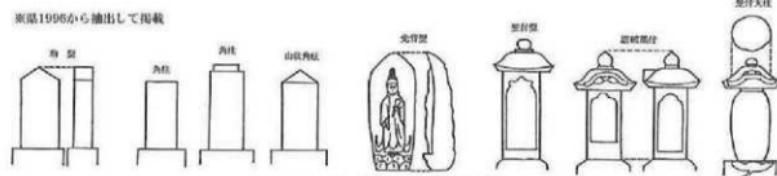
覆土 内部には、厚15～25cmの土砂が堆積していた。土層は、おおむね上層・中層・下層に分類される。このうち上層（第1層）は、黒褐色粘質土層で、粘性はあるが、締まりはない。腐葉土などを多く含んでいるため、佛如墓（石室A）の上層（第2層）と同様に石室外からの流入と思われる。

中層（第3層）は、褐色粘質土層で、粘性があり、締まりはややない。黄褐色を呈する地山粘質土と黒色土との混合土層であるが、次の第4層よりも黒色土の混じりが少ない。下層（第4層）は暗褐色粘質土層で、粘性があり、締まりがややない。地山土と黒色土との混合土層であり、金属製品や木製品を含む。中層・下層は埋葬段階から石室内にあった土砂と考えられ、掘削した際の地山土が残っていたものと思われる。下層で混合する黒色土が木質の遺物が分解されて生じた土砂であれば、木棺が腐朽した際、覆っていた地山土と混合して下層が形成された可能性がある。なお、一部に黒色粘質土があり（第2層）、第4層上面からの落ち込みにもみられる。締まりがなく、搅乱とも思われるが、木棺の一部など、埋葬段階に石室におさめられた何らかの木製品が腐朽したものである可能性がある。

遺物出土状況 遺物としては五鉗杵・銭貨・蝶番・釘などがあり、底面に近い下層（第4層）からの出土がほとんどである。五鉗杵はちょうど中央に位置するが、周辺10cmほどの範囲に、第4層とは異なる比較的強い粘性を帯びた黒色土がみられた。五鉗杵を収容していたものの痕跡であろうか。銭貨は、1／3程度の破片であるが、南西側で検出された。土砂をフルイにかけて遺物を回収しているが、他の破片を見出すことはできなかった。蝶番は北東隅とそのやや南側、北西隅とそのやや南側で各1点、釘は南辺側・西辺側から数点出土している。佛如墓と同様に、扁状に閉鎖式となる部分があった木棺の存在が想定される。特に、南辺では、釘3点が間隔をおいて並んで検出されている。埋葬段階の状況が反映されているとすれば、出土位置の間隔から、木棺の底板と南側の側板とは4本の釘で接合され、出土したのはそのうちの東側3本と考えられる。



第6図 深井一四氏作製 慈眼寺歴代住職墓跡調査図(一部改変)



第7図 墓標のおもな形態

註

- 1) 深井一四氏は歴代住職墓の墓標を調査し、改修前の配置や各墓標の形態・銘文の概要を模式的な図にまとめている(第6図)。また、吉川清司氏が撮影した写真は、改修前における住職墓の貴重な記録である(図版18)。いずれも今回の調査ではおおいに活用させていただいた。
- 2) 石灯籠1-18は、改修後も住職墓群の左手に置かれている。しかし、改修前の写真(図版18-a)をみると、火袋の部分が欠落している。改修の段階で、別の火袋が窓が開けられたと思われる。
- 3) 葬式についての個別の調査例が留めており、資料化された近世の墓標も多い。そして、墓地内における形態分類により、型式の変遷などが多く研究されている。分類の方法や名称などについては、調査対象となった資料や研究者によって若干異なるので、ここでは庚申懇話会編『日本石仏事典(第2版)』(1996年、雄山閣)にある黒敏夫氏の分類(図19)を参考とした。すなわち、板碑型・光背型・板型・笠付型・胸型・柱状型・自然石型丸彫り型・垂型の9種類である。そして、この他に無縫塔・五輪塔・宝鏡印塔などがある。なお、他も含めた歴代住職墓の墓標については、第VI章第2節において述べることとした。
- 4) 地蔵は菩薩であるから、宝冠を戴き、環珞などで身を飾る菩薩形をとるべきであるが、声聞形をとる。これは、いかめしい菩薩の姿では衆生が近づきにくいであろうという地蔵の大慈悲からであるといい、これを外現声聞・内秘菩薩の大行願という(八代1996)。

V 出土遺物

1 遺物の概要

佛如墓・秀如墓の2基の石室から出土した遺物は、総量でもおよそテンバコ1箱分であり、ほとんどが金属製品である。個々の遺物について説明をする前に、その概要として遺存状態について簡単にまとめておく。また、両石室で出土している仏具（金剛杵）についても概略の説明をしておきたい。

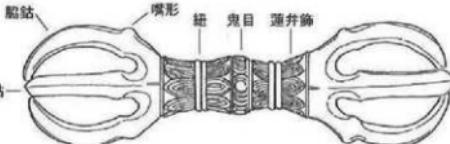
出土した遺物と遺存状況 佛如墓・秀如墓の2基の石室から出土した遺物は、銅製仏具・銅製鏡貨・鉄製接合具類などの金属製品と微細な木片である。これらの遺物は、両石室のおおむね中央付近で仏具が各1点発見されており、縁辺付近に接合具類が散見される点が共通している。石室内の土砂はすべてフリイにかけ、微細な遺物の見落としがないように注意した。しかし、これらの遺物を除けば、検出されたのは土砂とともに流入したと考えられる小砾などであり、石室内に伴う遺物と考えられるものは発見されなかつた。

当初は、墓跡の遺物であるため、土葬であれば、遺体（骨・衣類など）や木棺・副葬品（数珠など）などの出土が想定された。しかし、このような有機質の材質による遺物は腐朽することが多いので、本墓跡の場合もおおよそ200年前後後に、有機質の遺物は分解して土壊化したと考えられる。ただし、微細な木片が金属製品類に付着した状態で発見されている。これは金属の錆が浸透した結果、その部分だけが遺存できたものと考えられる。

金剛杵 両石室で発見された仏具は金剛杵である。『仏具大事典』〔岡崎1982〕では、金剛杵をおおむね次のように説明している。

金剛杵は、金剛智杵あるいは堅慧杵とも呼ばれる。杵の形に似た把の両端に、鉢（股）と呼ばれる鋭い刃を付けたもので、密教独特の法具である。もとはインドの武器とされているが、金剛とは堅固であり堅牢であることを意味し、この法具の強さを示している。密教がこれをとり入れて法具としたのは実用の武器としてではなく、この利器の備える堅固と摧破の二徳の力をかりて、人間の心の中の煩惱の賊を打ちくださり、本来の仮性をあらわにするための助けとしようとするものである。また、金剛杵は把の両端につく鉢の数や形の違いにより、独鉢杵・三鉢杵・五鉢杵・九鉢杵・宝珠杵・塔杵・九頭竜杵などに分類される。さらに、形式や構造面で特殊なものとして、都五鉢杵や割五鉢杵のようなものもある。ほかにも經典などには二鉢・四鉢・四面十二鉢などがみられるが、実物としては見出しがたい。また、中央の把の部分の裝飾方法の違いによって、鬼目杵や鬼面杵などにも分類される。

今回出土した金剛杵は2点とも五鉢杵である。五鉢杵は、把の両端に中鉢、その四方に脇鉢をつけたもので、五鉢金剛とも呼ばれる。金剛杵の中でも重要視された法具とされている。



第8図 金剛杵部位名称図 (原図: 戸根はか2003 参考: 岡崎1982)

2 遺物各説

出土した石室別に概要を説明する。内容としては、五鉢杵・錢貨・蝶番・釘・鎧がある。その他に微細な木片があるが、図化は困難であり、蝶番・釘に付着したもののみを触ることとする。

1) 佛如墓（石室A 図版13・14・30）

図化した遺物は、すべて石室覆土の第4層から出土したものである。

五鉢杵（1） 石室の中央よりもやや奥側（北側）から1点出土した。鋳造による銅製で、全長9.0cm（3寸）である。中央の把は長さ3.6cm、両端の鉢はいずれも長さ2.7cmなので、片方の鉢と把の長さの比は7.5:10である。また、把の最大径は中心の鬼目を有する部分で1.3cm、最小径は紐の部分で0.9cm、鉢の最大径は2.2cmおよび2.4cmである。脇鉢は中心部分に向けてやや傾き、先端が中鉢に接しているものや、中鉢の側面へ入り込んでいるものもある。ただし、全体的には破損もないのに、遺存状況としては比較的良好といえる。把の中央には、梢円の鬼目が4ヶ所に付されている。鬼目は丸く盛り上がり、中心に半球体、その周囲に3重の沈線がめぐる。鬼目の両側には無文の節を挟んで、蓮弁飾となる。蓮弁飾は、2条の紐で締められた前後8葉の蓮弁帯であり、弁の内部は6対の沈線によって表現されている。さらに無文の節をはさみ、両端には鉢が接続される。鉢の中鉢は、断面の形態は方形であるが、匙面と呼ばれる窪みはみられない。基部では4面とも三角形状に隆起している。そして、この隆起に対応するように、脇鉢の腰部も中心側・側面側の3面が三角形状に隆起し、外側の面には3mmほどの突起物が付されている。これは、嘴形と呼ばれる装飾が形態化したものと考えられる。

すでに述べたように、五鉢杵を含めた金剛杵は、堅固と強度を備えていたものである。しかし、1の把には装飾に繊細さがうかがえ、鉢は把よりも短く、武器に由来する力強さを感じられない。これらは、近世にみられる特徴である。

蝶番（2～5） 4点出土しており、すべて図化した。欠損している部分があり、鉢の付着も著しいが、おおよその形態を把握することは可能である。蝶番は2枚の鉄板と回転軸、そして釘からなるが、鉄板の組合せ部分が管状になっているもの、鉢などのために回転軸は明瞭ではなかった。形態は長方形であり、幅8.5cm前後（2寸8分）、長さ約11cm（3寸6分）、厚さ約0.1cmを測る。いずれも裏面には木片が伴っており、2枚の板を接合していることは木目からの観察でも明らかである。板に対しては釘で固定されている。鉢で隠れている部分もあるが、各鉄板に四隅と中央の5本、2枚で計10本の釘が打たれていたと推測される。ただし、釘は左右対照の位置ではなく、各個体でも異なっている。長さは1cm強ほど（約4分）、頭部の直径は0.4～0.5cmと思われる。

釘（6～11） 鉢の付着が著しく、釘との認定が困難なものもあったが、確認されたのは21片であった。ただし、これらは細片で、同一個体が含まれている可能性がある。すべてに木片が伴っており、木箱の接合具として用いられたと思われる。図化が可能であったのは6点のみとなった。6・7は、頭部が残存していない幅0.4～0.5cmの釘のほか、直交する方向に0.3cmの小さい釘が打たれている。8～11は、幅0.4～0.5cmの釘が確認される。そして、釘に伴っている木片を観察すると、釘の頭部付近に横方向の木目があり、その部分以外の木片とは別の木片となっている。つまり、釘で接合された横板と縦板のそれぞれ一部を示している。横板の厚さは、8～10が1.8cm（6分）、11が2.2cm（7分）である。なお、8・11では、

板に対して釘がやや斜めに打たれている。それぞれの長さは、6・7が3寸（約9cm）、8～11は2寸（約6cm）と推測される。

鎌（12・13）確認されたのは、1／3～1／2を欠損した2点のみである。それぞれは一端を欠いているが、残存する胴部の長さのバランスから、同一個体ではないと思われる。胴部の断面は0.7～0.8cm×0.5cmの長方形である。表面は鋸の付着が著しい。

2) 秀如墓（石室B 図版14・31）

図化した遺物は、すべて石室覆土の第4層から出土したものである。

五 鉗 杵（14）石室のほぼ中央、粘性の強い黒色土を伴って出土した。鋳造による銅製で、全長6.4cm（2寸1分）である。両端の鉗は長さが1.9cmおよび2.0cm、中央の把は長さが2.5cmなので、片方の鉗と把の長さの比は約8：10である。また、鉗的最大径はいずれも1.9cm、把的最大径は最も中央の部分で1.0cm、最小径は紐帶で0.8cmある。計8本の脇鉗には、変形しているものや先端部が欠損しているものもあるので、鉗の形状はやや歪んでいる。鬼目は明らかではない。形式化したことによってわずかな装飾が施されていた可能性もあるが、表面の磨食のために観察は困難である。また、幅はわずか1mmであり、両側の蓮弁飾とを画す無文の節とともに3条の紐に見える。蓮弁飾は、2条の紐で締められた8葉の蓮弁帯であり、各弁は2重の沈線による簡略化した表現となっている。そして、両端には無文の節によって鉗が接続される。鉗の中鉗は幅3mmで、断面の形態は底面のみられない方形である。脇鉗は、腰部に形式化した嘴形をそれぞれに持ち、先端は中鉗から約2mm離れる。

表面が腐食していることにもよるが、全体的に本来は武器であった金剛杵が持つ力強さや銳利さを感じられない。したがって、1と同様に近世の所産と考えられる。

鏡 貨（15）1／3程度の破片が1点のみ出土した。右の「永」の一部と下の「通」が読める事から、寛永通寶（銅一文鏡 1636年初鋤）と考えられる。背面には錢文は確認されない。また、「寛」・「寶」の部分が欠損していることから、いわゆる「古寛永」・「新寛永」などの分類は不明である。

蝶 番（16～19）4点出土しており、すべて図化した。欠損している部分があり、鋸の付着も著しいが、おおよそその形態を把握することは可能である。形態は長方形であり、幅4.2cm前後（1寸4分）、長さ5.5～5.7cm（1寸8～9分）、厚さ約0.1cmを測る。ただし、2～5と同様に回転軸は明瞭ではなかった。いずれも裏面には木片が伴っており、2枚の板を接合していることは木目からの観察でも明らかである。板に対しては釘で固定されている。鋸で隠れている部分もあるが、片側の鉄板の上部と下部に2本ずつと中央に1本の計5本が打たれていたと思われる。鉄板2枚で釘は計10本となるが、比較的遺存率の高い17では、一方が5本確認されるものの、他方では3本のみである。また、釘も対称の位置ではなく、各個体でも異なっている。そのため、釘が打たれる位置は、それほどの正確さ・同一さは意図されてはいなかつたようである。釘の長さは1cm以上（4分か）、頭部の直径は0.3～0.4cmと思われる。

釘（20～24）鋸の付着が著しく、釘との認定が困難なものもあったが、確認されたのは19片であった。ただし、これらは細片で、同一個体が含まれている可能性がある。すべてに木片が伴っており、木棺の接合具として用いられたと思われる。図化が可能であったのは5点のみとなった。いずれも幅0.5cmほどを測る。そして、8～12と同様に、釘で接合された横板と縦板のそれぞれ一部が残存する。横板の厚さは、一部が欠損する23を除くと、いずれも2.3～2.5cm（8分）である。長さは、木片が付着した状態で7.8～8.8cmであるため、もともとは2寸5分（約7.5cm）ではなかつたかと推測される。

VI 総 括

1 慈眼寺佛如墓・秀如墓にみられる埋葬

佛如墓（石室A）・秀如墓（石室B）には、遺体をはじめ、衣類や装身具、副葬品などがあったと思われるが、一部の木片を除けば、有機質の遺物は分解されて土壌化したと考えられる。確認されたのは限られた資料であるが、佛如墓・秀如墓の構造や遺物から考察される埋葬についてまとめておきたい。

1) 石室の構築

まず、構築された石室について、佛如墓（石室A）と秀如墓（石室B）とを比較してみたい。すでに第IV章第2節で報告しているが、佛如墓の内寸は幅（東西方向）約0.8～0.9m×奥行（南北方向）0.7～0.8m×深度約1.1m（約0.7m）、秀如墓は幅（南北方向）約0.75～0.8m×奥行（東西方向）0.7～0.8m×深度約1.1m（約0.6m）であり、佛如墓よりも秀如墓がやや小さい。また、使用されている石材や積み方ともやや異なっている。佛如墓では、上半に安山岩、下半に玄武岩が多く用いている。壁面には一部に未加工の状態を残しながら長方形に切り出した面を向ける。そして、隙間に小さな礫が充填する。秀如墓では、玄武岩が大半を占めている。おむね方形に切り出された礫が、壁ごとに上下方向の2列を基調として積み上げられている。被葬者である佛如と秀如の没年差は30年であるが、このような石室の構築にみられる違いは、時期が下って技術が進歩したため、あるいは製作した技術者（集団）が異なるためといった理由が考えられよう。

なお、I地点の西辺をめぐる石組も安山岩が多く用いられている。佛如墓造営の際に石組も設けられた可能性がある。

2) 木棺の復元試案

次に、石室内から出土した遺物のうち、木片・蝶番・釘・鍵に着目する。木片は遺存した板材の一部、蝶番・釘・鍵はそれらの接合具であるため、木棺の資材と考えられる。木片はすべて微細なものであるため、当初の形状も推測できないが、接合具の出土位置などから、木棺の復元を試みたいと思う。

佛如墓 板材の腐朽による崩落で、すでに接合具は原位置を離れていると考えるべきであるが、北壁付近の釘6、東側中央の蝶番2、南西隅の蝶番5が平面的な位置をある程度保っていると仮定すれば、おむねこれらの出土位置を囲んだ範囲に木棺があったのではないかと推測される。南東隅には蝶番3があるが、やや突出している感があり、原位置の参考とはなり難いであろう。これらの想定から、木棺の高さは不明となるが、幅（東西方向）80cm（2尺6寸）×奥行（南北方向）65cm（2尺1寸）である（約0.5m）。そして、板の厚さは、釘に伴って遺存した木片から、1.8cm（6分）と2.2cm（7分）が確認されている。ただし、釘6・7には、伴う木片に別個体の小さい釘もあった。また、鍵12・13もある。これらがどのような位置にあったのかはさらに検討を要しよう。なお、蝶番4点（2～5）は東辺と西辺の南側（手前側）から出土しているので、その付近は開閉式に作られていたと思われる。

秀如墓 南辺に釘3点(20~22)が出土している。南壁から約5cm離れた位置に釘の頭部がそろっており、先は北側を向いている。これは、木棺の板材は分解されてしまったものの、釘のみが遺存した状況と考えられよう。釘20は東壁から10cmの位置にあり、20~21間は14cm、21~22間は24cmの間隔である。大きさや石室とのバランスから、22と西壁との間に釘があったと想定されるが、20~21間と近似した間隔で釘が打たれたとすれば、西壁からも約10cm離れた位置にあったと思われる。したがって、釘の位置から木棺の南側側面の幅は55~60cm(1尺8寸~2尺)ほどではないかと推測される。また、北壁付近には釘23・24がある。20~21のように原位置に近い状態を保っているとは考えにくいが、釘頭部の位置を参考にして距離を求めれば、東西の側面の幅はおむね65~70cm(2尺1寸~2尺3寸)となろう。したがって、高さは明らかにできないが、木棺は幅(南北方向)55~60cm(1尺8寸~2尺)×奥行(東西方向)65~70cm(2尺1寸~2尺3寸)とおおよそ推測される(約0.4m)。東西方向の土層断面には、西壁から10~20cmに黒色土層(第2層)があった(図版9)。東壁付近では確認できなかったが、板材があった痕跡とすれば、釘の位置からのこのような推測への傍証になると思われる。板の厚さは、第V章第2節で述べたように2.3~2.5cm(8分)と考えられる。そして、蝶番4点(16~19)のうち、19を除く3点が西辺(手前側)中央から出土しているので、その付近は閉鎖式に作られていたと思われる。

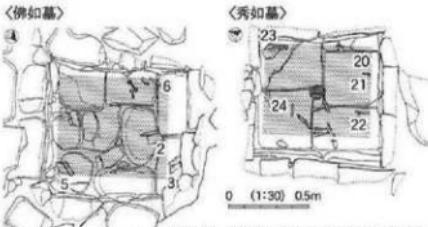
3) 五鉢杵

最後に、両石室で出土した五鉢杵について触れる。『仏具大事典』[岡崎1982]によれば、古代では鬼目が大きく、鉢も貌利であり、武器に由来することがわかる本来の形態であったが、中世になると次第に形骸化が進むという。そして、近世以降の特徴としては、武器としての原姿が伝えられず、鉢よりも把が長くなる。報告した五鉢杵(1・14)も7.5~8:10の比で把が長い。また、全長は1が9.0cm、14が9.4cmであり、非常に短い。慈眼寺と同じ真言宗豊山派で、同じ地域の組に属する現職の僧によれば、携帯用としてこのような短い五鉢杵を用いることがあるとのことである。使用する際は、把を握るのではなく、把を縱方向に指でつまみ、片方の鉢を先に向けて用いるといふ。

これらのことから、1・14が製作されたのは近世であり、被葬者が生前(1は18世紀中葉、14は19世紀初頭頃か)に使用していたもので、副葬品として遺体とともに石室へ納められた可能性があるといえよう。そして、佛如墓では石室の北側(奥側)の中央、秀如墓ではほぼ中央付近から出土しているので、被葬者が五鉢杵を携えて埋葬されたことが考えられる。

4) まとめ

大きさや構築方法での違いはみられるが、佛如と秀如の埋葬には、石室・木棺・五鉢杵という要素があることでは共通している。つまり、埋葬は土葬であり、遺体は木棺に入れて、地下の石室へ納め、地上には墓標を設ける。そして、遺体には密教で用いる五鉢杵を伴わせている。また、木棺の大きさから考えれば、遺体は手足を折り曲げ、上体を立てた形の座位屈葬であったと推測されよう。



第9図 慈眼寺佛如墓・秀如墓本棺想定図

2 慈眼寺の歴代住職と住職墓の展開

前節では、佛如墓・秀如墓の発掘調査に基づいた慈眼寺住職墓での埋葬を考察してみた。すでに述べているように、境内には佛如墓・秀如墓以外にも多くの住職墓が分布している。本節では、数少ない資料にみられる歴代の住職を整理し、住職墓の展開を探ることで、佛如墓の理解を深めることとした。

1) 歴代住職と佛如・秀如

まず、墓標銘などから住職を集めて整理し、発掘された石室の被葬者である佛如と秀如について、まとめてみたい。

a. 諸資料にみられる慈眼寺の僧

『谷根史記』によれば、慈眼寺は3回の火災にあったとされており【吉川1971】、過去帳などの記録類の多くは焼失されたといわれている。残された諸資料のうち、住職名が記された資料としては、墓標やその周辺にある石造物の銘文、その他の寺物にみられる記載などがある。

墓 標 僧名と没年¹⁾を判読できた墓標は、II-6（果寛・1706）、I-11（良證・1737）、V-4（良運・1742）、I-10（良信・1754）、I-12（弘運近住・1757）、I-4（良忍・1770）、I-3（良慶・1771）、I-6（義光・1778）、I-9（義統・1779）、I-8（良海・1780）、I-17（佛如・1786）、I-7（秀澄・1789）、II-3（繁林昌栄・1801）、II-4（同・1803）、I-16（秀如・1816）、V-5（秀戒・1833）、II-1（秀道・1834）、同（秀應・1843）、I-2（秀譽・1844）、III-1（秀成・1863）、I-1（春乘・1873）、V-2（秀善・1891）、I-13（快豊・1903）、V-1（良傳・1963）である。

これらの墓標のうち、秀戒は「當山十二世」（III-1）、秀深は「當寺十一世」（III-2）、良傳は「廿八世」（V-1）、良運は「行瀧山第八世」（V-4）とあるため、明らかに慈眼寺の住職であったと考えられる。しかし、春乘は「比丘尼」（I-1）、秀譽は「多聞院十二世」（I-2）、繁林昌栄は「近位尼」（II-3）、秀善は「豊山五十三世／前長者」とあるため、すべてが慈眼寺住職の墓標ではない²⁾。なお、墓標の分布や形態などについては次項で述べることとする。

墓標以外の石造物 墓標の周辺に分布する石灯籠などにも住職名や紀年を含む銘文が刻まれている。多くの銘文があるが、墓標のみでは知り得なかった事項に限って取り上げる。

まず、山門付近にある巡拝塔には、1773年の立て、「願主救運」とある（第2表3）。周辺には日蓮宗徒による題目塔などがあるが、この巡拝塔は真言宗徒によるもので、教運も慈眼寺の僧と思われる【渡辺1991】。同じく山門付近には、1840年立ての二十三夜塔があり、「十二世法印秀成」とある（第2表5）。また、「秀遍塚」は、「筆子 小俣新十郎／小俣治兵衛」などとあるので、1871年に没した秀遍³⁾を門弟が供養した筆塚と思われる（第2表8）。最後に、2002年に改修された歴代住職墓の壇には、現住職である「第三十世精峰房太禪代」が記されている（第2表9）。

その他 石造物以外では、すでに触れた「新潟県神社寺院仏堂明細帳」【根立ほか1990】に記載されている1679年没の「中興果精法印格衣」がある（第2表1）。また、山門に現存する半鐘には、1770年の銘と「願主／當山第八葉／芯翁佛如」と刻まれている（第2表2）。本堂内にある1859年の置灯籠には「十二世秀戒代」（第2表6）、1862年の常燈明には「十三世秀遍代」（第2表7）とある。

| 番号 | 形態 | 僧名 | 紀年 | 銘文 | 備考 |
|-------|---------|-------|-----------------------------|--|----------------------------|
| I-1 | 3 b | 春雨 | 1873. | [正面] (ア)春雨比丘尼位[右側面]明治六年癸酉 [背面] (ア)法印良慶力不生位 | 基礎正面に鏡子 ・孟が陽別 |
| I-2 | 3 b | 秀譽 | 1844. 8. 9. | [正面] (ア)權大僧都法印秀譽[左側面]和尚位[右側面]武昌足立郡丸 ヶ崎村・多聞院十二妣/天保十五年八月九日 [背面] (ア)法印秀譽 | 多聞院は現さい たま見沼区丸 ヶ崎に所在 |
| I-3 | 1 a - 3 | 良慶力 | 1771. | [正面] 明和八年□/ (ア)法印良慶力不生位 | |
| I-4 | 1 a - 3 | 良忍 | 1770. | [正面] 明和七年□天/ (ア)法印良忍不生位 | |
| I-5 | 1 a - 2 | 快通 | | [正面] (ア)法印快通 不生位 | |
| I-6 | 1 a - 1 | 義光 | 1778. | [正面] 安永七戊天/ (ア)法印義光不生位/六月十三日 | |
| I-7 | 1 a - 2 | 秀證 | 1789. 12. 2. | [正面] 天明九年□天/ (ア)法印秀證/正月二十二日 | |
| I-8 | 1 a - 2 | 良海 | 1780.10.11. | [正面] (ア)法印良海 位(背面)安永九年庚子十月十一日 | |
| I-9 | 5 a | 義純 | 1779. 6. 20. | [正面] 義純妙跡/ (ア)〔像〕/安永八丁/六月二十日 [正面] (ア)國賀義純不生位/宝曆四年 | |
| I-10 | 5 a | 真信 | 1754. | [正面] (ア)國賀真信不生位/二月二十日 | |
| I-11 | 1 a - 2 | 良證 | 1737. 2. 20. | [正面] 元文一己季/ (ア)法印良證不二位/二月二十日 | |
| I-12 | 1 a - 2 | 弘運 | 1757. 2. | [正面] 宝曆十七丁/ (ア)弘運近住不生位/二月初丑日 | |
| I-13 | 1 a - 3 | 快慶 | 1903. 5. 25. | [正面] 明治三十六年/第十三世/中僧都快慶 本不生位/五月二十五日 | |
| I-14 | 5 b | | | | |
| I-15 | 1 b | | | [正面] [空輪] (ア)もししくは(サ)カ[堪輪] (バ)ク[火輪] (ギ)ク [水輪] (ハ)リ [地輪] (ア) [左側面] [空輪] (アン) [風輪] (カ) [火輪] (ラ) [水輪] (バー) カ [地輪] (アン) [右側面] [空輪] (ア)ク [風輪] (カ) [火輪] (マ)もししくは(ロ)カ [水輪] (ハ)リ [地輪] (ア) [背面] [空輪] (ア) [風輪] (ラン) カ [火輪] (アラン) [水輪] (バ)ク [地輪] (ア) [背面] (ア) | |
| I-16 | 4 | 秀如 | 1816. 9. 24. | [正面] 地蔵菩薩像[右側面] (ア)傳燈阿闍梨秀如 和尚位[左側面] 文化十三丙子九月二十四日春秋七十二歲/當寺二而カ寛政十二申六月 九日免許/永代十三夜燈金二十両喜捨奉/在任三年 | 石室B |
| I-17 | 3 a | 佛如 | 1788. 5. 12. | [正面] 地蔵菩薩像[右側面] (ア)傳燈阿闍梨佛如大和尚[左側面] 天明六年五月十二日 | 石室A |
| I-18 | 石灯籠 | 秀通 | | | |
| II-1 | 3 b | 秀通 | 1834. 6. 24. 1843.10.23. | [正面] (ア)秀通法師/秀通法師/本不生位[右側面]道天保五年六月 廿四日[左側面]慈天保十四年十月廿三日 | |
| II-2 | 5 b | | | | |
| II-3 | 1 a - 3 | 繁カ林昌榮 | 1801.10.17. | [正面] 享和元百天/ (ア)繁カ林昌榮近侍カ(桂)尼/十月十七日 | |
| II-4 | 1 a - 3 | 良カ同カ | 1803. 9. 29. | [正面] 享和三癸巳亥天/ (ア)權大僧都法印良カ同カ和尚位/九月廿九日 | |
| II-5 | 1 a - 1 | 果圓カ | | [正面] (ア)權大僧都法印果圓カ | |
| II-6 | 1 a - 2 | 果寬 | 1706.10. 7. | [正面] 宝永丙戌天/ (ア)法印果寬 不生位/十月七日 | |
| II-7 | 5 b | | | | |
| II-8 | 2 | | | [正面] □ | |
| III-1 | 1 a - 4 | 秀成 | 1863.12. 3. | [正面] (ア)傳燈阿闍梨秀成和尚 [基礎正面] 古山十二世[同右側面]石工/西田源之助[同左側面]字號 口常領同田山/蒲原氏彥也幼稚時/口先師秀深和尚而解口/而幼 俗而後事師院多/年少即而往當寺三十/有三年口口口禪鳴子カ/合物 換星々移院文久三癸/亥十二月三日享年五十/八歲而殞落矣/慈壽秀 滿謹 | |
| III-2 | 6 | 秀深 | | [頂部正面] (ア)塔身正面當寺十一供秀深 | |
| IV-1 | 1 a - 4 | 真傳 | 1963. 6. | [正面] (ア)廿八供真傳僧都位[背面]昭和八年六月建之 | |
| IV-2 | 1 a - 4 | 秀善 | 1891. | [正面] 菩薩五十三供/ (ア)前長者大僧都秀善 本不生位[背面]明治二 十四年建之 | |
| IV-3 | | 秀成 | 1842.12. | 正面[塔身]開祖/興教大師[基礎]現在/秀成代[基礎]施主泰川與三 治 左側面[塔身]七百年御遠忌堂/為現堂二世安樂/天保十三壬寅冬十 二月[基礎]石工 源之助 背面[塔身]玉雲詔春大師/ (ア)中野道與居士位/觀月妙經大師[線 香代]小侯家 | |
| IV-4 | 1 c | 真運 | 1742. 7. | [基礎左側面] 出/寛保二/太歲在/壬戌/七月[同右側面]燈中/慈輪 徹白[同背面]行藏山/第八世/吉列/真運 | |
| IV-5 | | 秀成 | 1833. 5. 1. | [左側面] 奉納法大師一千年前御遠忌者爲御恩謝/德正法久住勢之了/、 天保四癸未五月一日 當寺十二世/秀成應言[右側面]懇禮中 | |
| IV-6 | 石灯籠 | | | [正面] 奉納口前口燈口/為二口口 | |
| IV-7 | | | 1742. 7. | [正面] 觀音二天七月/施主 當村德左助 | |
| x-1 | 1 b | | | [地輪正面] (ア)道智信 | 原位置不明 |
| x-2 | 石灯籠 | 秀通 | 1867. 1. | [正面] 火燈[同背面]觀音三/春三月建立之/十三世秀通代 | 原位置不明 |

第1表 慈眼寺歴代住職関係墓標等一覧表

b 歴代住職の世数

集成された僧のうち、第〇世と称されている場合は確実に慈眼寺の住職であったと考えられる。それらを抽出すると、第13世快豊（I-13）、第12世秀戒（III-1・第2表5・第2表6）、第11世秀深（III-2）、第28世良傳（IV-1）、第8世良運（IV-4）、第8世佛如（第2表2）、第13世秀遍（第2表7）、第30世精峰（第2表9）となる。

しかし、ここで問題点が浮上する。①まず、良運と佛如がともに第8世である。また、快豊と秀遍もともに第13世である。同じ第8世・第13世が2人存在している。②次に、第12世秀戒・第13世秀遍が19世紀中葉に生存が確認される（V-5・第2表5・第2表8・第2表6・第2表7）のに対し、第28世良傳が1963年に没しており（V-1）、第13世秀遍の没後約100年の間に14人の住職が存在したことになる。つまり、生存時期と世数（代数）との間に大きな隔たりが生じている。

①の問題については、それぞれの没年等を比較すると、良運は1742年、佛如は1786年であり、快豊は1903年、秀遍は1871年である。それぞれ40年前後（1～2世）の差であるが、このようになった原因を明らかにすることはできない。ただし、12世秀戒の墓標（III-1）の基礎の左側面には被葬者の業績が記されているが、末尾に「慈眼寺住職」とある。また、文中には「先師秀深和尚」との文言もある。したがって、19世紀前葉～中葉の慈眼寺住職は、第11世秀深→第12世秀戒→第13世秀遍と継承されていったと考えられる。

そして、②の問題については、慈眼寺の歴代住職の世数には2通りの数え方があると考えられる。矛盾が指摘される第12世秀戒・第13世秀遍と第28世良傳を基準に、住職を次のように分類する。

α ：第28世良傳（1963年没）・第30世精峰（現）

β ：第8世良運（1742年没）・第8世佛如（1786年没）・第11世秀深（没年不明）・第12世秀戒（1863年没）・第13世秀遍（1871年没）・（第13世快豊 1903年没）

α では、第28世良傳が最後の住職であり、その後は兼務で第29世精峰氏から現在の第30世精峰氏へと継承されてきたことが関係者からの聞き取りで明らかである。 β では、第11世秀深から第13世秀遍までの継承はすでに述べたとおりである。その他についても、①の問題が残るが、大きな齟齬はないと思われる。また、19世紀後葉に記録された「新潟県神社寺院仏堂明細帳」には、「当代迄十四世」（第2表1）とあることから、1871年に没した第13世秀遍との年代的な連続性があり、 β を裏付けるものである。このように、数え方を α と β に分類した場合、それぞれには生存時期と世数との矛盾や大きな隔たりはないと思われる。それでは、なぜ2通りの数え方が生じたのであろうか。

ここで、再び『谷根史誌』[松川1971]から慈眼寺の由緒を確認する。慈眼寺は、天正年間（1580）金山城主青海川下総守の菩提寺として建立された。境内は1反4畝12歩（約1,425.6m）あった。上杉景勝の移封と共に移転し、無住職となつた。その後は村の菩提寺として再興され、鶯尾不動院（宮之首）の奥院である不動庵の檀家がすべて移った。

慈眼寺建立から第28世良傳没までは28世383年を数える。1世あたり平均約13.7年であり、大きな齟齬のない数値と思われる。そのため、 α は慈眼寺の開祖を第1世とする一般的な数え方と思われる。それに対し、 β は世数が α より小さく、途中の住職から数え直している可能性がある。途中の住職とは、「中興」と称される果精（第2表1）が考えられよう。無住職となつていた寺の再興にも関わっていたとすれば（第Ⅱ章第2節第2項）、第1世として扱われることもあり得るのではないだろうか。推測の域を出ない部分が多いが、仮説として提示しておきたい。

| 番号 | 資料 | 題名・紀年 | 説文等 | 参考 |
|----|------------------|----------------|--|------------------------|
| 1 | 新潟県神社古院 仏堂明細帳 | 黒精 1679. | 慈眼寺 新潟県管下越後国中頃都谷根村字山山 真言宗、本尊正觀世音開山年月不詳、中興果積法印格衣、延宝七年十一月廿八日没ス、当代迄十四世 | 樹立はか1990 |
| 2 | 半鐘 | 佛如 1770.10. | 奉寄信一尺五寸半鐘／一口／越後國頭城谷根村／行藏山慈眼寺當／往物／因明和七寅初冬吉旦／願主／當山第八葉／悲喜佛如／治工高村住藤原定次／山岸右衛門 | |
| 3 | 遷拌塔 | 教運 1773. 7. 1. | [正面] (佛跡菩薩像) [右側面] 奉納經西國四國巡礼供養佛願主／教運敏白(左側面)乃至法界／平等利益 安永二年巳初日願主・大矢長兵衛 | 柏崎市立博物館1991 |
| 4 | 供養塔カ | 1786. | [正面] (ア) /弘法大師・遍照金剛 [左側面] 大矢・天明六年 /施主・長兵衛内貞 | 弘法大師座像 |
| 5 | 二十三夜塔 | 秀戒 1840. 9. | [正面] (サク) 二十三夜塔[背面] 鹿天保十一庚子九月吉日 /十二世法印秀戒代・小保新兵工・小林市右工門 /新澤新之助 | |
| 6 | 燈籠 | 秀戒 1859. | 安政六年己未七月 慈眼寺什物 十二世秀戒代・世話人小林市右衛門 施主小保新兵衛母・小保角右衛門母 深井八郎兵衛母・早津兵衛母 新潟市郎兵衛母 小保喜左衛門母 | 鶴岡大久保歌代源四郎義富作 篠川はか1978 |
| 7 | 常燈明 | 秀通 1862. | 文久壬午年谷根村行藏山慈眼寺十三世秀通 /願主同所小林市右衛門 | 篠川はか1978 |
| 8 | 筆塚 | 秀通 1871. | [正面] 明治四年五月六日遷化・秀通塚・筆子・小保新十郎・小保治兵衛(齊南)・大道院光遷義口居士 | |
| 9 | 歴代住職墓門柱 | 精峰 2002. | [右] 慈眼寺墓改修・平成十四年十一月吉日 [左] 第三十世精峰房太禪代・植中一同 | |

第2表 慈眼寺関係のおもな資料一覧表(除:墓標等)

c 佛如と秀如

そして次に、今回の調査で対象となった石室の被葬者である佛如と秀如について、これらの資料から明らかになったことをまとめおきたい。

佛如 今のところ、佛如に関する資料は、山門に現存する半鐘(第2表2)と自身の墓標(I-17)のみである。半鐘の銘文には、「當山第八葉」とあるから、佛如は第8世(β)であることがわかる。ただし、前述したように、良運墓(IV-4)にも「行藏山第八世」とあるため、問題は残る。

ところで、墓標I-17には、「傳燈大阿闍梨佛如大和尚」とある¹¹。諸橋轄次著『大漢和辭典』[諸橋1971]によれば、「傳燈」とは「佛家で法を傳へること」である。そして、760年に僧位を定めた四位十三階にある系列のひとつが傳燈であり、傳燈法師位・傳燈満位などの位階があった[中井1987]。また、「阿闍梨」とは、真言宗・天台宗の密家で灌頂の職位をうけたもので、授法ができる人を大阿闍梨と呼ぶ[篠田1979]。傳燈大阿闍梨は古代には見受けられない僧位であるが、近世では天台宗・真言宗および真宗(東派・高田派)において僧位の制度を設け、それぞれ昇進の規定があったとされる[中井1987]。墓標の銘文のうち、阿闍梨号を有しているのは、良信(I-10)・佛如(I-17 傳燈大阿闍梨)・秀如(I-16 傳燈阿闍梨)・秀戒(III-1 傳燈大阿闍梨)のみである。佛如の業績・功績の大きさがうかがえる。

秀如 秀如についての資料は、墓標I-16のみである。右側面には、「傳燈阿闍梨秀如 和尚位」とあり、秀如の僧位がわかる。また、左側面には秀如の業績を讃えた銘文があるため、参考となる。銘文によれば、秀如は文化13年(1816)9月24日、73歳で没している(1744年生)。慈眼寺にて寛政12年(1800)6月9日に免許を得た(57歳)。そして、永続的に十三夜燈へ金20両を喜んで施した(喜捨した)。慈眼寺には33年在住した。慈眼寺で没したのであれば、1783年(40歳)頃から在住していたと考えられる。そのため、佛如や秀澄(1789年没 墓標I-7)と寺での在住期間が重複する。先に第11世秀深→第12世秀戒→第13世秀通(β)という住職の継承を示したが、それに先行する第8世佛如→第9世秀澄→第10世秀如という継承も想定されよう。しかし、秀澄の没した1789年には、まだ秀如は免許を得ておらず、傍証は得られない。なお、金20両の喜捨は、秀如の財力をあらわしている。

2) 住職墓の墓標

次に、境内に散見された墓標から、住職墓の展開を検討してみたい。

a 改葬以前における各地点の住職墓

第IV章でも触れたように、改葬以前の住職墓は、おもに境内やカミラントウ付近の4地点に散在していた。慈眼寺の役員等による記録類から改葬以前の状況をまとめておきたい。

I 地点 カミラントウの東側にあたる最も高い段の中央に位置する。I～V地点では最多である18基の墓標や石塔類があった。幅約6mの範囲におおむね前後2列で構成されているが、前列にはI-9～15、後列にはI-1～8が並んでおり、前列には仏像（I-14）や五輪塔（I-15）などもみられる。今回調査した石室は2基（I-16・I-17）ともI地点にある。ただし、I-17は他と同様に西側（正面）を向いているが、I-17は列から突出し、南側（内側）を向いている。紀年銘を有する墓標は11基あり、18世紀前葉～20世紀初頭の年代がみられるが、うち6基は18世紀前半に集中する。詳細は第IV章第1節を参照されたい。

II 地点 カミラントウの南西部で、入口付近に位置する。8基が改葬の対象となっている。II-1・2の位置はII-3～6よりも若干前へ出るが、これらはおおむね横1列に並んでいる。そして、II-1・2の前にはII-7・8が立つ。4基の墓標に紀年銘があり、うち3基は19世紀前半である。他のII-6は、墓標の紀年としては最古の宝永3年（1706）銘を持つ。

III 地点 現本堂の北西、シモラントウへの通路沿いにある。墓標2基が横1列に並ぶ。19世紀中葉の住職墓である。深井一四氏の記録（第6図）によれば、その他に倒壊した石灯籠が1基ある。III-1は基礎・基壇の装飾が富む無縫塔で、III-2は類例のない形態であり、2基とも形態は特徴的である。

IV 地点 境内の南西、山門を抜けた右手にある。墓標・墓碑が5基、石灯籠が2基ある。いずれも19世紀後半以降の紀年銘がある。なお、改葬の対象となったのは、おもにI～III地点の墓標等であり、本地点の墓標等で今回移動されたものはない。

その他 改葬された墓標のうち、原位置が不明な五輪塔をx-1・石灯籠をx-2とする。

b 墓標の形態

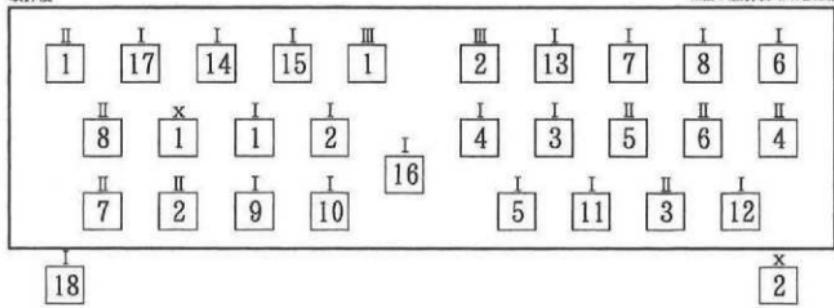
これら慈眼寺歴代住職墓のうち、I地点の佛如墓（I-17）・秀如墓（I-16）から墓の下部構造である石室が発見され、調査された。他の住職墓にも、石室あるいは別形態の下部構造を伴っていることが想定されよう。しかし、現状ではすべての住職墓について地下構造を明らかにできない。そこで、上部構造である墓標に着目し、住職墓の展開を探る手がかりとしてみたい。

墓標の研究は、各地において墓地ごとの調査が進み、墓標の形態分類などがされている。慈眼寺の墓地についてもすべての墓標について調査を行えば、墓地内における住職墓の位置付けなどを検討できるものと思われる。しかし、今回は時間的な制約のため、対象を住職墓のみとする。ここでは、汎用性の高い谷川章雄氏の分類（以下、「谷川分類」）[谷川1988]や県敏夫氏の分類（以下、「県分類」）[県1996]を参考とし、墓標等35基を次の6類に形態分類した。すなわち、1類：塔形をなすもの、2類：塔身の断面が舟形を呈するもの、3類：塔身が方柱形のもの、4類：笠付方柱形のもの、5類：像容をかたどったもの、6類：その他である。以下、各類の細分や概要を述べる。

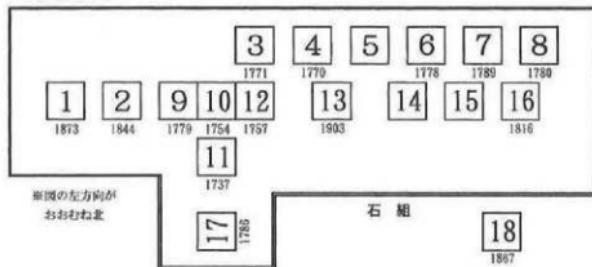
1 類 塔の種類から、1a類：無縫塔、1b類：五輪塔、1c類：宝篋印塔に細分される。それぞれ、谷川分類のA-3類・A-1類・A-2類、県分類の無縫塔・五輪塔・宝篋印塔に該当する。

改葬後

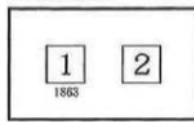
墓園の左方向がおおむね北



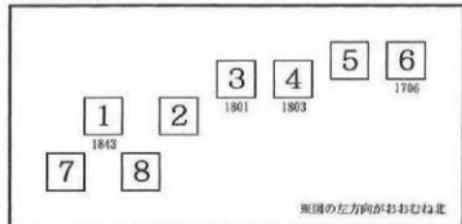
I 地点(改葬前)



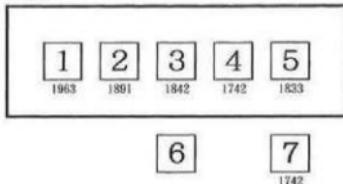
III 地点(改葬前)



II 地点(改葬前)

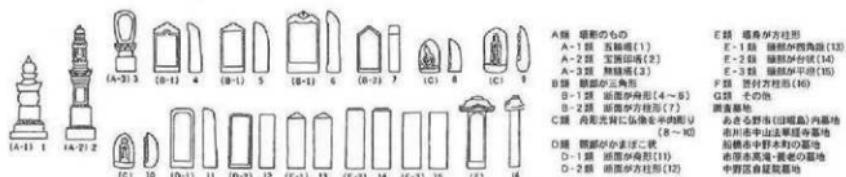


IV 地点



墓園の下方向がおおむね北

第10図 慈眼寺歴代住職墓跡 墓標配置模式図 (番号の下の数字は紀年銘の西暦)



第11図 江戸市中および周辺の墓標分類 [谷川1988]

1 a 類は、16基を数え、住職墓中最多である。紀年銘の年代幅は18世紀初頭～20世紀中葉である。無縫塔は重制と単制があるが〔県1996〕、16基ともすべて単制である。別名の「卵塔」とは形態が異なるものがほとんどで、さらに細分すれば、1 a - 1 類：頂部が丸いもの（I - 6・II - 5）、1 a - 2 類：頂部が丸く、先端が尖るもの（I - 5・I - 7・I - 8・I - 11・I - 12・II - 6）、1 a - 3 類：明瞭な稜線で頂部が画され、先端が尖るもの（I - 3・I - 4・I - 13・II - 3・II - 4）、1 a - 4 類：1 a - 3 類よりも頂部が平坦で、先端が突起状に強調されたもの（III - 1・IV - 1・IV - 2）がある。資料数が少ないため、明確にはできないが、1 a - 1 類・1 a - 2 類は18世紀、1 a - 3 類は18世紀後半以降、1 a - 4 類は19世紀後半以降の所産と推測できそうである。

1 b 類は2点（I - 15・x - 1）である。いずれも近世の形態と思われる。1 c 類も1基（IV - 4）のみである。18世紀中葉の紀年銘がある。

2 類 谷川分類のD - 1 類に該当し、県分類の板胸型に近い。1基（II - 8）のみである。正面に銘文の痕跡があるが、判読はできなかった。

3 類 頂部の形態により、3 a 類：かまぼこ状を呈するもの（I - 17）、3 b 類：段状に造り出されたもの（I - 1・I - 2・II - 1）がある。3 類は県分類の柱状型に該当し、3 a 類は谷川分類のD - 2 類、3 b 類はE - 2 類に近い。3 a 類は、佛如墓1基のみであるが、正面に像容を施し、左右の側面に銘文を有するものである（第IV章第2節第1項）。3 b 類は、正面および左右もしくはいずれかの側面に銘文を有するものである。特に、II - 1 では秀道と秀應という2名の僧を弔っている。3 a 類には18世紀後半、3 b 類には19世紀の紀年銘がある。

4 類 谷川分類のF 類、県分類の笠付型にあたる。該当するのは秀如墓1基（I - 16）のみである。佛如墓（I - 17）と同様に、正面に像容を施し、左右の側面に銘文を有する（第IV章第2節第2項）。秀如は19世紀前半に没している。塔形の1 類とともに、より高い身分や財力の表徴とされる形態である〔松崎2001〕。

5 類 5 a 類：舟形光背を有するもの、5 b 類：舟形光背を有しないものに細分する。前者は、谷川分類のC 類、県分類の光背型である。2基（I - 9・I - 10）が確認される。容姿は異なるが、2基とも地蔵菩薩の立像で18世紀中～後葉の紀年銘がある。後者は、3基（I - 14・II - 2・II - 7）がある。いずれも座像である。特定の被葬者のために造立されたのかは不明である。当初あった塔身が分離・欠損した可能性もある。銘文が確認されないため、造立時期等も明らかではない。

6 類 III - 2 は、1～5 類にも分類できず、他の資料でも類例を見出せなかった。角柱に円盤を戴いた形態で、円盤には梵字、角柱には被葬者名を刻む。紀年銘はないが、被葬者は第11世秀深であるから、19世紀中葉の所産であろうか。

c 墓標の変遷

慈眼寺歴代住職の墓標は、果寛墓（II - 6 1706年 1 a - 2 類）を最古とし、最後の専従の住職である良傳墓（IV - 1 1963年 1 a - 4 類）を最新とする。18世紀は、初頭から1 a - 2 類があり、中～後葉に1 a - 1 類・1 c 類・3 a 類・5 a 類がみられ、1 a - 3 類が20世紀まで続く。19世紀になると3 b 類がみられ、4類・6類が散見し、1 a - 4 類が20世紀まで続く。この変遷は、江戸周辺のもの〔松崎2001〕と大きな隔たりはない。

また、地点別にみると、I 地点は18世紀後半を中心に18世紀前葉～20世紀初頭、II 地点はII - 6が18世紀初頭であるのを除けば19世紀前半、III 地点は19世紀中葉頃、IV 地点は18世紀から20世紀までとなる。

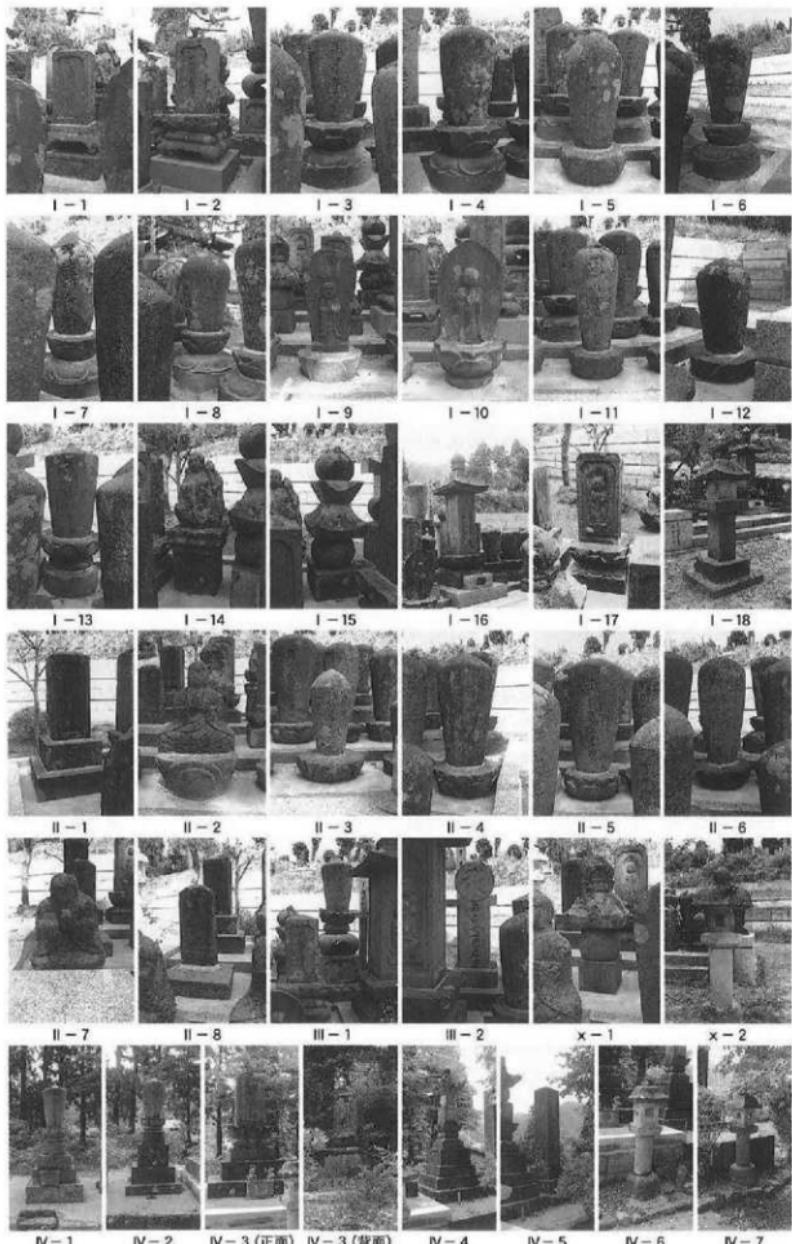


写真4 慈眼寺歴代住職の墓標等

3) 住職墓の展開

本節では、慈眼寺の歴代住職について墓標を中心とした諸資料を整理し、概観してきた。最後に、これらの資料や住職墓の配置などから垣間見られる住職墓の展開を追ってみたい。

境内での展開 まず、境内に分布するI～IV地点の展開を考えてみたい。慈眼寺の住職墓が、今日までに遺存しやすい材質である石製の墓標を用いるようになるのは、18世紀初頭頃からと考えられる。現存する最古の墓標は果寛墓（II-6 1706年）である。果寛墓はII地点の南端にあったが、続く良澄墓（I-11 1737年）以降は、「カミラントウ」のほぼ中央で斜面頂上に近いI地点に墓標が立てられる。I地点では、それぞれ130年近い隔たりを持つ秀譽墓（I-2 1844年）・春乘墓（I-1 1873年）・快豊墓（I-13 1903年）を除けば、紀年名を有する11基の墓標が18世紀前葉～19世紀前葉という時期的なまとまりにある。そのため、I地点は18世紀前葉～19世紀前葉に没した住職が埋葬される場であった可能性が高い。なお、秀譽・春乘・快豊は慈眼寺と関係が深い僧ではあるが、必ずしも住職ではなかったと思われる。

その後、紀年銘からみれば、19世紀前半のII地点へと住職墓が変遷したようにみえる。しかし、II地点の繁カ林昌榮墓（II-3 1801年）・良カ同カ墓（II-4 1803年）は、I地点の秀如墓（I-16 1816年）以前に設けられている。すでにI地点の広さは限られており、寺への業績としてはやや劣る繁カ林昌榮・良カ同カはII地点へ埋葬されたのであろうか。この推測が可能であれば、II地点はI地点よりもやや格下の僧が埋葬される地点であったと考えられよう。ただし、さらに検討が必要である。

続く19世紀中葉の第11世秀深・第12世秀成は、「シモラントウ」への通路沿いにあるIII地点へ埋葬されている。墓標の規模や形態は特徴的であり、他の住職墓から独立している感がある。

以上のことから、住職墓が形成される地点を時期的な消長でみると、おおむねI地点（18世紀前葉～19世紀前葉）→II地点（19世紀中葉）と変遷し、19世紀前半にはII地点に埋葬される僧もあったと推測できる。なお、IV地点の墓標等には、時期的なまとまりはみられない。すでにコンクリートの壇上にあるため、過去に山門付近に点在した墓標等が集約・整備された可能性がある。

I地点での展開と佛如墓・秀如墓 ところで、境内の住職墓のうち、墓標下から埋葬のための石室が発見されたのは、佛如墓・秀如墓のみで、I地点に限られる³⁾。慈眼寺最古の墓標II-6（果寛墓）はII地点にあるが、I地点は墓標としては古い段階（18世紀前葉～19世紀前葉）のものが集まって形成されているので、当時の住職墓の展開を探ることができると思われる。

墓標の配置と紀年をみると（第4・10図）、後列（I-3～8）は1770～80年代であるが、前列は年代幅がある。しかし、I-9～12は18世紀中～後葉、19世紀中葉の墓標は北端のI-1・2にあるというまとまりがありそうである。

ここで、佛如墓（墓標I-17）のみが他と異なって南側を向き、西側へ突出した位置にあることに着目してみたい。佛如墓造営段階（1786年没）では、I-14・15は不明だが、I-1・2・13・16・18は存在していない。そのため、佛如墓を正面にした際、右手奥に舟形光背（5a類）、手前に無縫塔（1a類）の歴代住職墓が並ぶという構図になる。段丘崖を利用する「カミラントウ」では、東西方向にあまり奥行がないため、南北方向に奥行を持たせるような配置にしたと考えられる。ここに佛如墓を中心とした空間を形成するという意図がうかがえるのである。また、西側をめぐる石組は、ほとんどが安山岩である。秀如墓の石室では玄武岩が主体的であるが、佛如墓では安山岩も多用されているので、石組は佛如墓の段階で築かれたと考えられる。墓標の銘文のうち、傳燈大阿闍梨は佛如（I-17）と秀成（III-1）のみである。

業績や功績も大きかったと思われる。したがって、I 地点においては、佛如墓造営段階にこのような整備がなされたのではないかと推測される。

佛如の30年後に没した秀如は、大きな財力を有した僧であった。寺などへの貢献や業績は大きかったと思われる。すでに II 地点への墓は始まっていたが、秀如墓も佛如墓を中心とした I 地点の一部に位置付けられて埋葬される。そして、墓標の形態（4 類）や規模に生前の業績や功績があらわされていると考えられる。

その後、住職墓は III 地点へと移る。I 地点の北端に当寺の住職ではないが、秀譽墓（I-2 1844年）、春乘墓（I-1 1873年）、中央には快豊墓（I-13 1903年）が置かれる。

3 調査のまとめ

以上、今回の発掘調査や慈眼寺関係の資料から、報告と考察を述べてきた。最後に、これらを要約し、まとめたい。

行瀧山慈眼寺は、柏崎市大字谷根（旧頸城郡谷根村）に所在する、真言宗豈山派の寺院である。16世紀後半頃の開基とされるが、詳細は明らかではない。2002年に慈眼寺歴代住職墓の改葬を行っていた際、2基の石室が発見され、発掘調査が実施されることとなった。2基の石室は、それぞれ佛如（第8世 1786年没）・秀如（第10世カ 1816年没）の墓標直下で、遺体を埋葬した施設である。遺体や衣類など、有機質の遺物はすでに腐朽して遺存してはいない。しかし、出土した遺物などから、遺体の容器は一部が開閉式となる木棺で、いずれも五鉢杵を携えていたことがわかった。そして、慈眼寺歴代住職の墓標は18世紀初頭からみられる。境内には I～IV 地点の 4ヶ所に墓標があったが、18世紀前葉～19世紀前葉を中心とする I 地点では、おそらく佛如墓の造営段階において、それまでの墓標や石組などが整備されたと推測される。

近世墓について、地上にある墓標と地下にある施設の両者を調査した事例は限られる⁶⁾。その意味においても、今回の調査で得られた資料の価値は高い。そして、これらの資料には、当時の社会背景や精神文化が少なからず反映されているのであり、今後理解を深めていきたい。

註

1) 墓標の紀年銘は、墓標の建立や供養の期日となっている場合もあるため、必ずしも没年を示しているとは限らない。ここでは、各音の生存時間から歴代住職を探ることを目的としている。そのため、墓標の建立や供養も死没からさほど年の数を離れていないければ大きな齟齬にはならないと考え。墓標の紀年はいずれもひとまず没年あるいは没年時を示しているとみなしておきたい。

2) 1722年の「跡崎村田郷帳」によれば、谷根村には僧が3名いたことがわかる（第Ⅵ章第2節）。谷根村の寺院は慈眼寺のみであるため、住職以外にも2名の尼が寺に在住していたことになる。したがって、本書で住職墓の墓標として一括する墓標の中には、住職以外の僧も含まれている。

3) 光音秀通は、「官領方さん」と呼ばれた住職である。旗本出身であり、住職であった8年間（1863～1871）を谷根で過ごす。仁和寺宮高彌親王とは田舎加といわれ、戊辰戦争で越後口の範師となって柏崎を訪れた親王と再会した際のエピソードは有名である。

ところで、秀通の師は、真言宗豈山派長谷寺の大僧正守野秀海（墓標IV-2）である。慈眼寺の寺宝に、仏教護法の天尊をあらわした十二天金剛12体（市指定文化財）があるが、これは1884年に秀善から贈られたものである。金剛には「天王寺」の文字がみられ、大阪の四天王寺との所縁がうかがえる。また、箱書には「古法眼ノ御直筆」とある。古法眼とは狩野元信（1476～1569のこと）であるので、絵像の作成時期は中世に遡る可能性が指摘されている〔萩川ほか1978〕。なお、秀善は越後の出身で、1822年に慈眼寺で度身を受けている。

4) なお、「大和尚」は、真言宗であることから、「だいわじょう」と読む。

5) 石室発見の翌横となった歴代住職の改葬作業では、佛如墓・秀如墓以外に石室は発見されていない。ただし、石室に限らず、他の住職墓にも墓標下に何らかの施設が設けられた可能性はある。今回は、墓標+石室という形態の墓の調査に限られたが、他の形態の墓やその変遷などについては今後の課題としておきたい。

6) 発掘調査例ではないが、柏崎市西長島の真珠院では、阿月秀快（1780年没）の入定所が調査されている〔松本ほか1993・森本ほか1993〕。真珠院は慈眼寺と同じ真言宗豈山派であり、時期も近い。これらを材料として研究すれば、当時の様相をより明確にできよう。

《引用・参考文献》

- 県 敏夫 1996 「無縫塔」・「石灯籠」・「墓塔」 庚申懇話会編『日本石仏事典』(第二版) 雄山閣
- 植木 宏 1987 「桂山城」・「谷根城」 柏崎市史編さん委員会編『柏崎の古代中世史料』(柏崎市史資料集古代中世篇) 柏崎市史編さん室
- 宇佐美篤美・山本 勉 1987 「小寺屋敷遺跡」 柏崎市史編さん委員会編『考古資料(図・拓本・説明)』(柏崎市史資料集考古篇1) 柏崎市史編さん室
- 大竹信雄 1973 「谷根の民俗」 月橋 委編『谷根 ダム・自然・文化』 三秀社
- 岡崎譲治監修 1982 「仏具大事典」 錦倉新書
- 岡本都栄 1987 「廻塚遺跡」 柏崎市史編さん委員会編『考古資料(図・拓本・説明)』(柏崎市史資料集考古篇1) 柏崎市史編さん室
- 柏崎市史編さん委員会編 1985 「柏崎の近世史料(貢租・町村概況)」(柏崎市史資料集近世篇2上) 柏崎市史編さん室
- 柏崎市立図書館編 1977 広瀬 典 原著『白川風土記 越後国刈羽郡之部』 柏崎市郷土資料刊行会
- 柏崎市立図書館 1991 「柏崎の石仏一石が語るもう一つの歴史ー」(第20回特別展 図録開館5周年記念)
- 金子拓男 1987 「谷根和田屋敷古墳群」 柏崎市史編さん委員会編『考古資料(図・拓本・説明)』(柏崎市史資料集考古篇1) 柏崎市史編さん室
- 久我 勇 1973 「谷根の歴史」 月橋 委編『谷根 ダム・自然・文化』 三秀社
- 庚申懇話会編 1996 「日本石仏事典」(第二版) 雄山閣
- 鶴田良洪 1979 「阿闍梨」 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第1巻 吉川弘文館
- 篠原芳三・三宮 勉・大竹信雄 1978 「谷根の文化財」 月橋 委編『谷根ー自然・文化・生活ー』 柏崎市ガス水道局
- 品田高志 1989 「柏崎・刈羽の古代土器製塙」『柏崎市立博物館館報』第3号 柏崎市立博物館
- 品田高志 1993 「柏崎平野の古代鉄生産遺跡ー藤橋東遺跡群の発見とその意義ー」『新潟考古学談話会会報』第12号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1994 「古代の青海川地区」『柏崎市の遺跡III』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第19集) 柏崎市教育委員会
- 竹内理三ほか編 1989 『角川日本地名大辞典』15 新潟県 角川書店
- 谷川章雄 1988 「近世墓標の類型」『月刊考古学ジャーナル』No.288 ニュー・サイエンス社
- 戸根与八郎・金子拓男 2003 「五智国分寺境内遺跡(仏具出土地)」上越市史専門委員会考古部会編『上越市史叢書』8 考古一中・近世資料一 上越市
- 中井真孝 1987 「耕作」 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第8巻 吉川弘文館
- 新潟県 1984 『新潟県史』資料編5 中世三文書編Ⅲ
- 日本石仏協会編 1997 『石仏巡り入門ー見方・倫しみ方』 大法輪閣
- 根立俊樹・高橋義昭・今井和幸・桑原紀昭 1990 「寺院の概況」市史編さん委員会編『柏崎市史』中巻 市史編さん室
- 松崎亜砂子 2001 「墓標の変遷」江戸遺跡研究会編『国説江戸考古学研究事典』柏書房
- 松本 哲・荒木計子・柴沼圭子 1993 「阿字觀入定の実例ー阿月秀快の入定所調査報告」日本ミイラ研究グループ編『日本・中国ミイラ信仰の研究』平凡社
- 諸橋徹次 1971 『大漢和辭典』縮写版(各巻)
- 森本岩太郎・平田和明 1993 「阿月秀快上人の遺骨について」日本ミイラ研究グループ編『日本・中国ミイラ信仰の研究』平凡社
- 八代恒治 1996 「地蔵菩薩」庚申懇話会編『日本石仏事典』(第二版) 雄山閣
- 吉川松蔵 1971 『谷根史誌』 大地堂印刷
- 米沢温故会 1977 『上杉家御年譜』二 景勝公
- 渡辺三四一 1991 「ムラと石仏ー谷根地区を例にー」『柏崎の石仏ー石が語るもう一つの歴史ー』(第20回特別展 図録開館5周年記念) 柏崎市立博物館

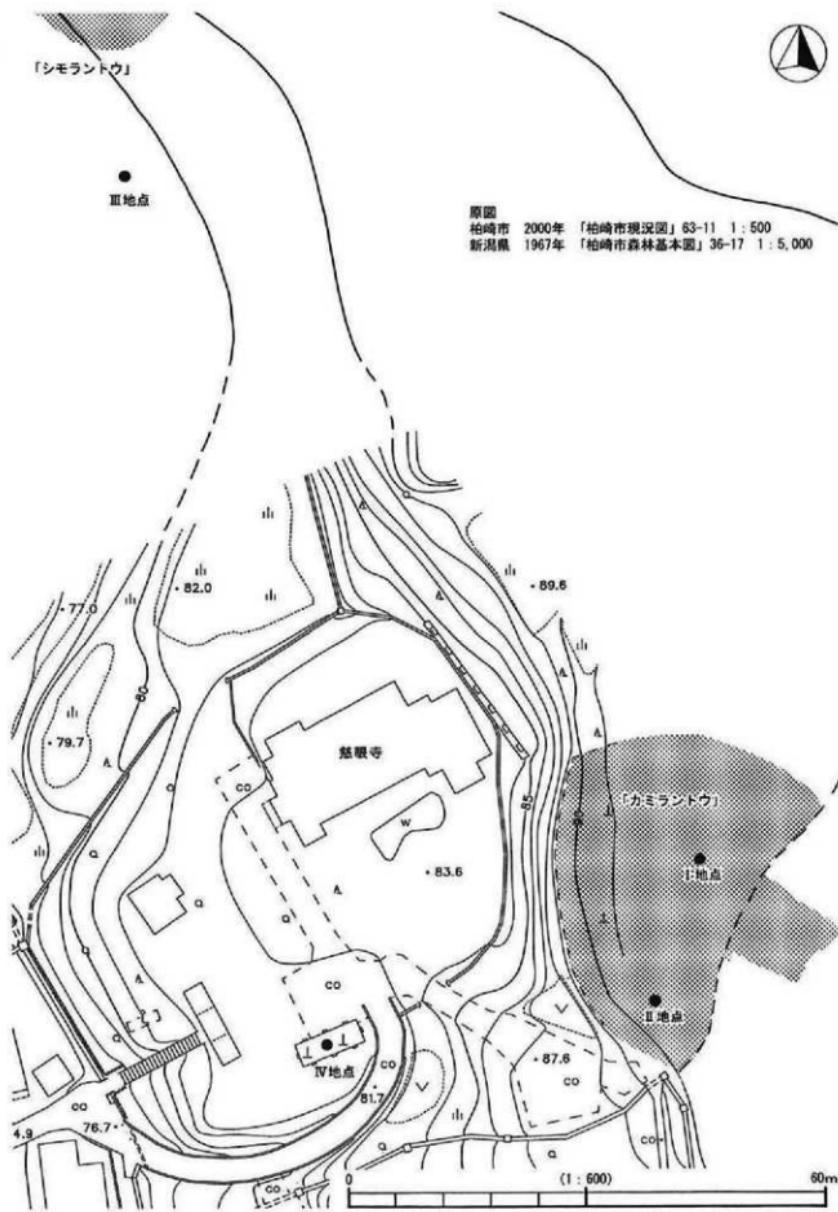
図版 1

慈眼寺歴代住職墓跡 位置と周辺の地形



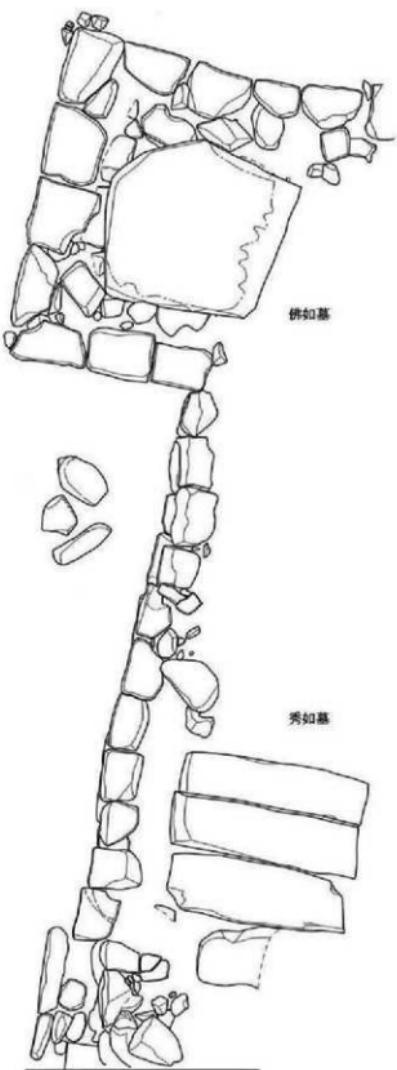
図版 2

慈眼寺歴代住職墓跡 墓地配置概要図



慈眼寺歴代住職墓跡 石室平面図

<墓標移転後>



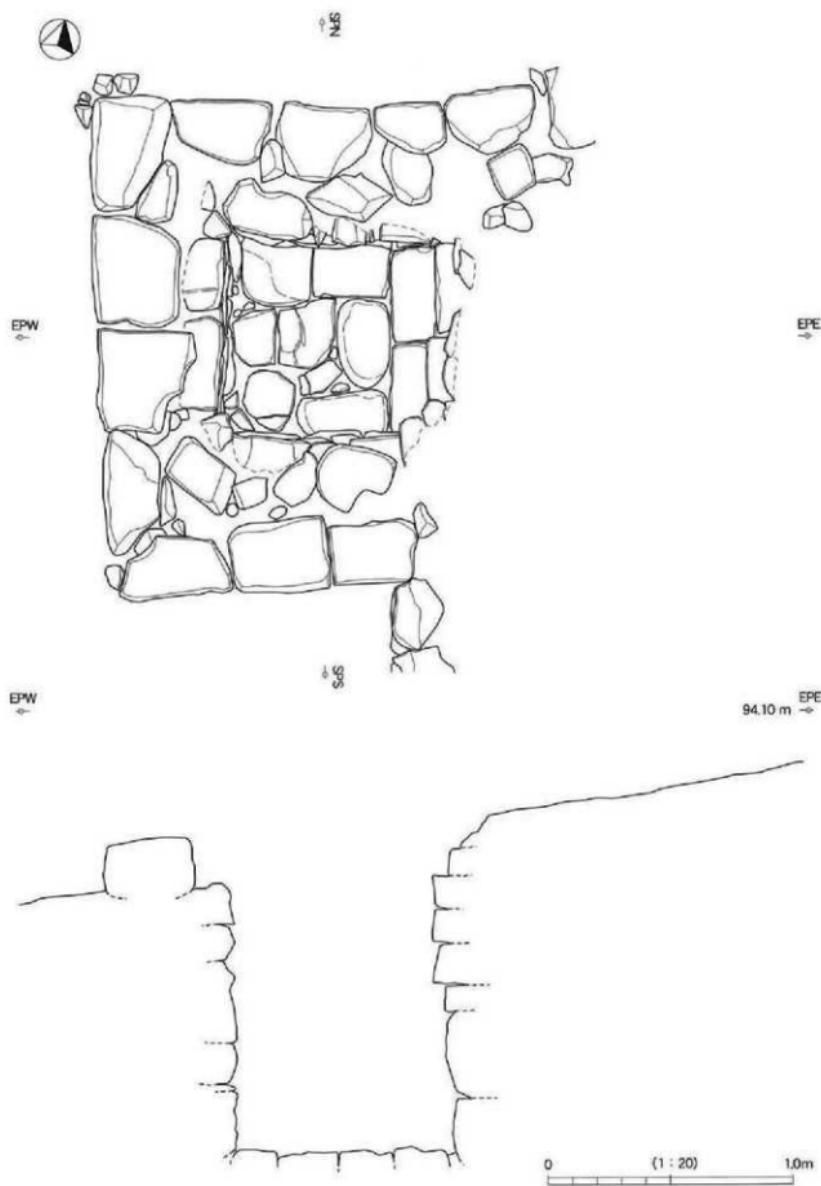
<蓋石除去後>



0 (1 : 30) 1.5m

圖版 4

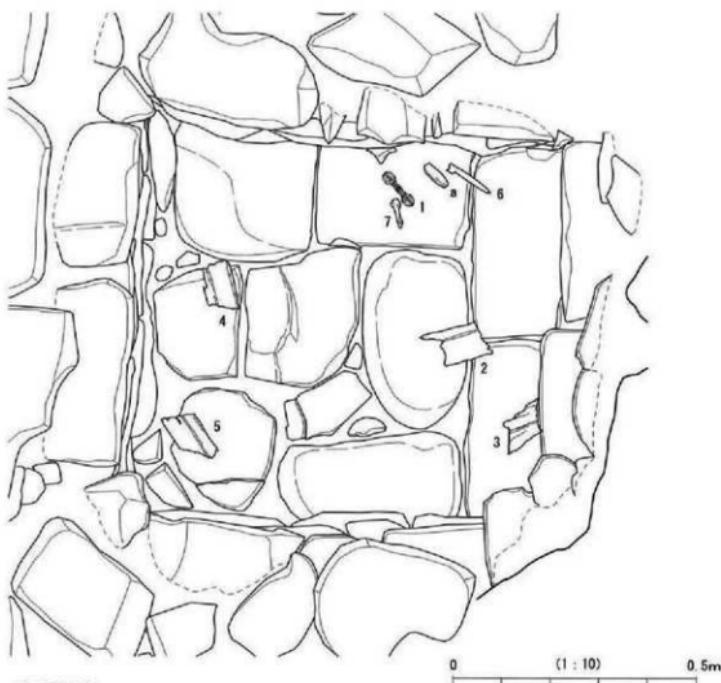
慈眼寺歷代住職墓跡 佛如墓 1 石室 1



慈眼寺歴代住職墓跡 佛如墓 2 石室 2



<遺物分布図>

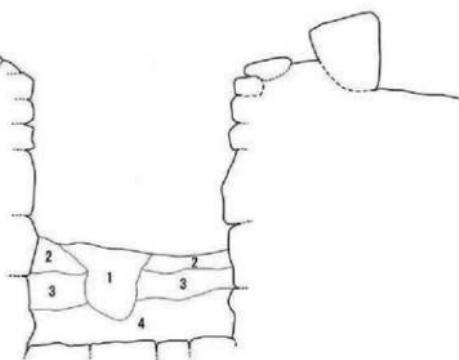


<土層断面図>

SPN

SPS
+ 93.80 m

1. 黒色粘質土層
粘性やあり。しまりあまりなし。
根茎土や根などが多く混じる。
2. 黒褐色粘質土層
粘性やあり。しまりあまりなし。
腐葉土などを多く含む。
3. 雑炭黒色粘質土層
粘性あり。しまりややなし。
腐植した木片や根などが集中するため。
やや赤色化した部分がある。
4. (4) 棕色粘質土層
粘性あり。しまりややなし。
腐植した木片や根などが集中して。
赤色化した部分が多い。



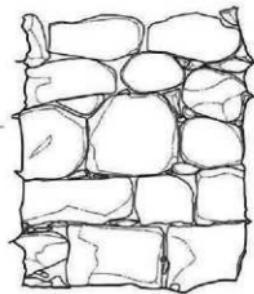
図版 6

慈眼寺歴代住職墓跡 佛如墓 3 石室 3

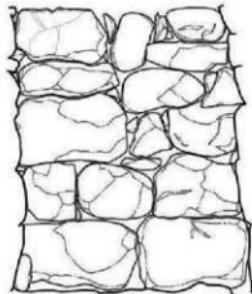
94.0m

93.0m

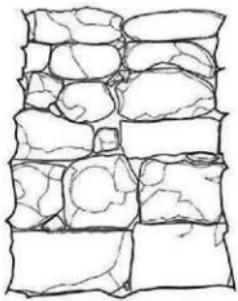
92.0m



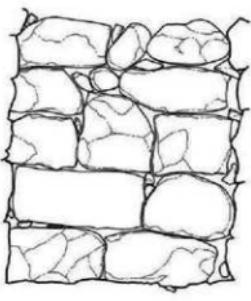
(西壁面)



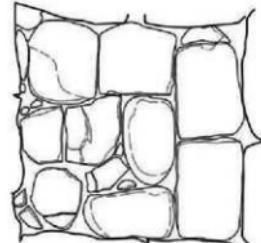
(北壁面)



(東壁面)



(南壁面)

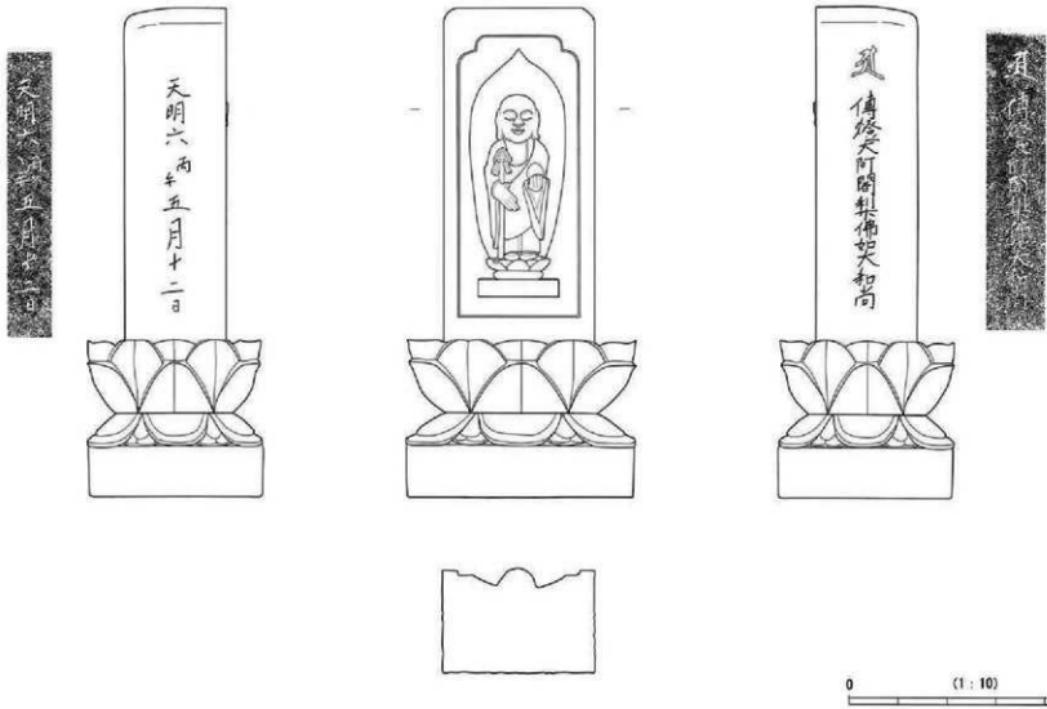


(底面)

0

(1 : 20)

1.0m

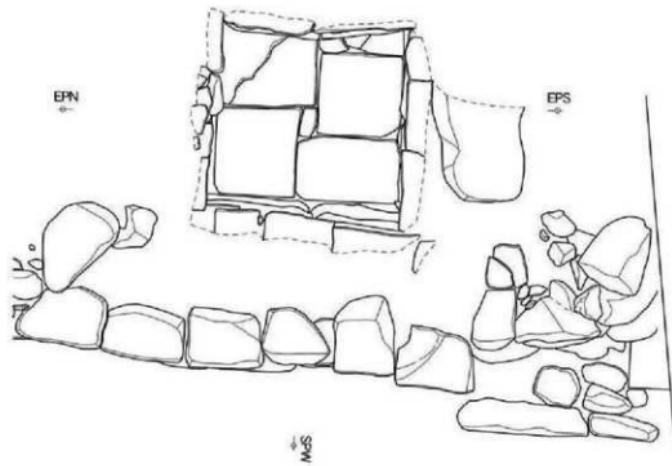


図版 8

慈眼寺歴代住職墓跡 秀如墓 1 石室 1



↑ N



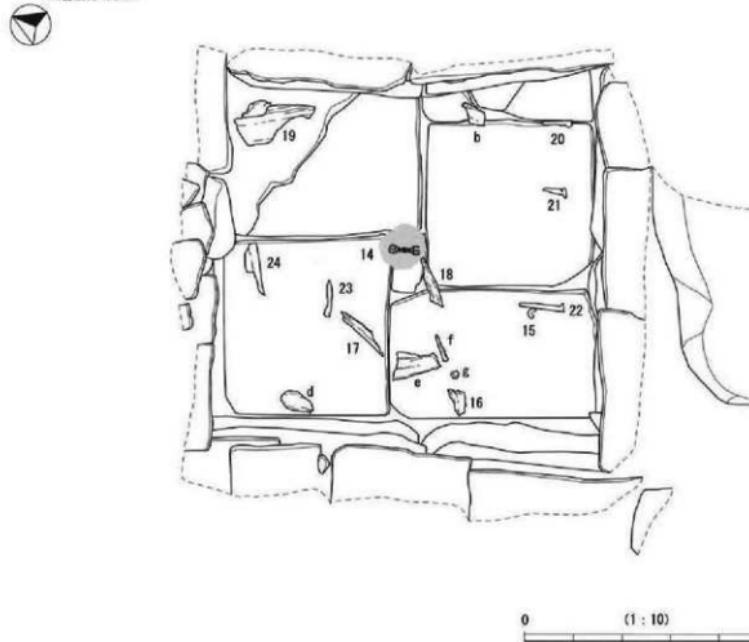
EPN
←

EPS
→ 93.50 m

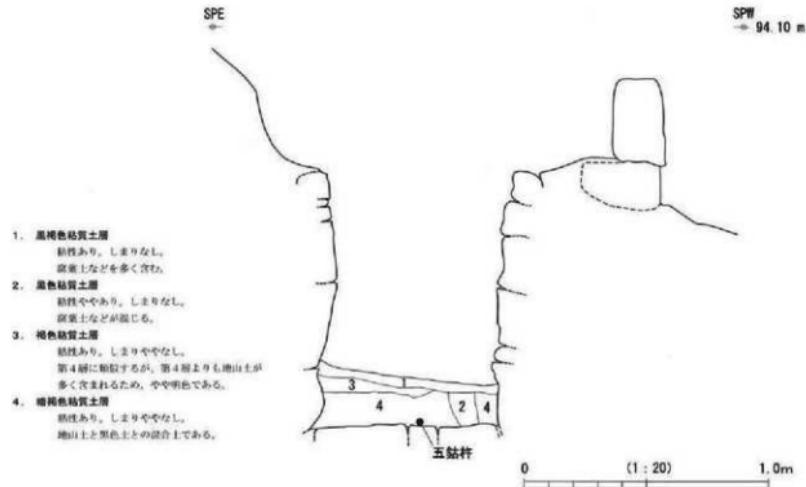
0 (1 : 20) 1.0m

慈眼寺歴代住職墓跡 秀如墓2 石室2

<遺物分布図>



<土層断面図>



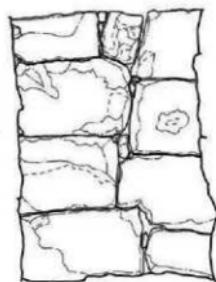
図版10

慈眼寺歴代住職墓跡 秀如墓 3 石室 3

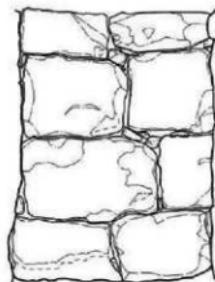
94.0 m

93.0 m

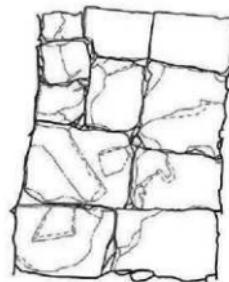
92.0 m



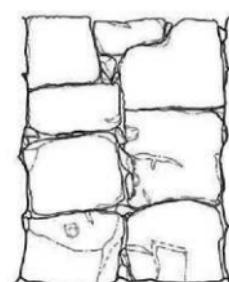
(北壁面)



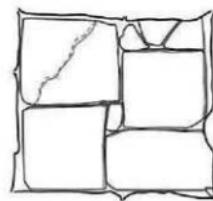
(東壁面)



(南壁面)



(西壁面)

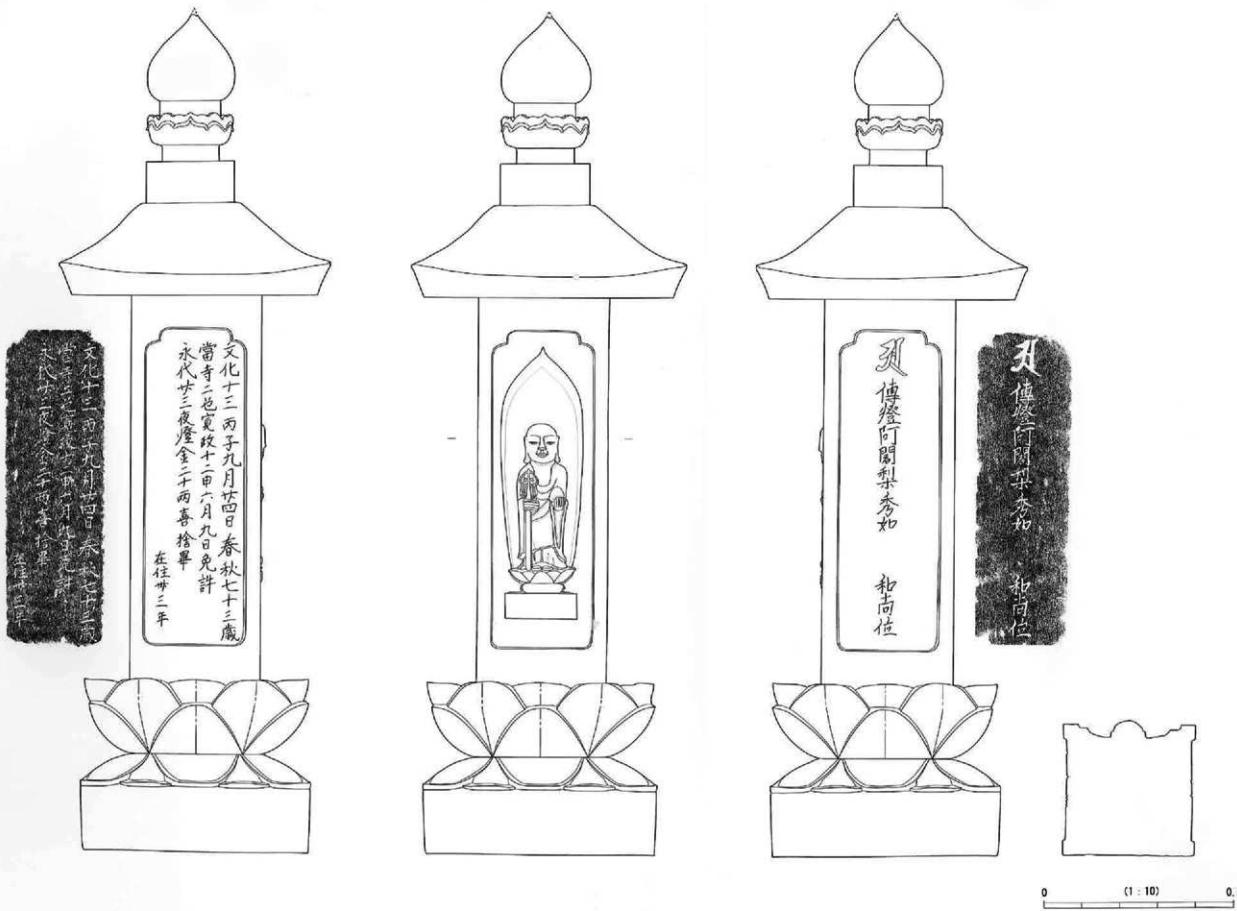


(底面)

0

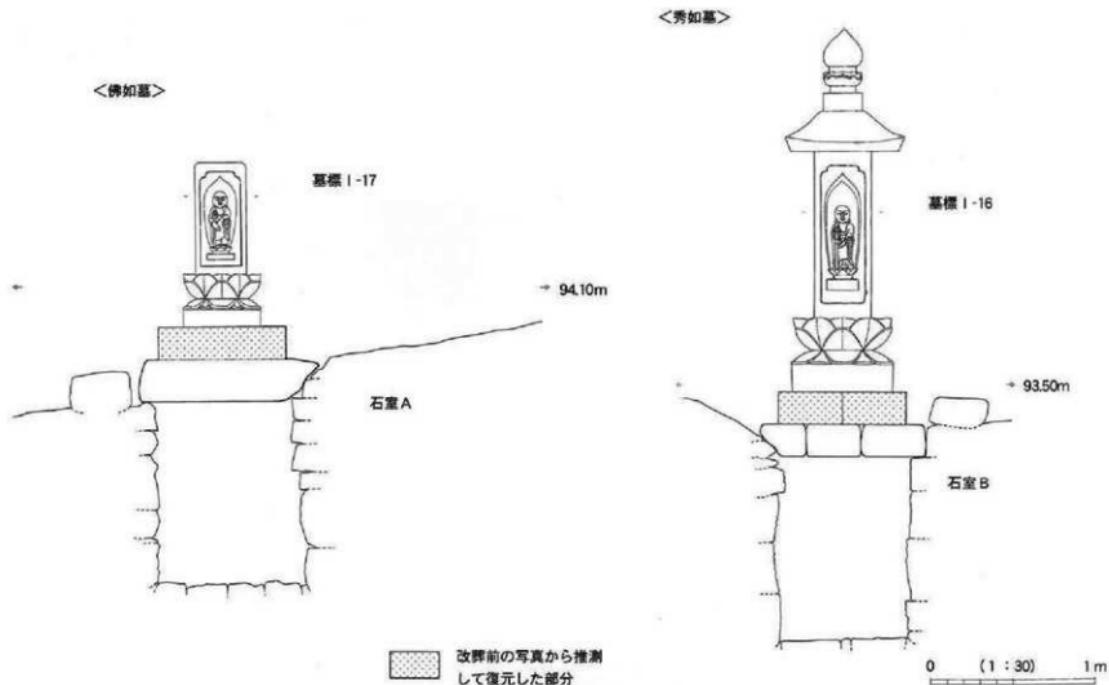
(1 : 20)

1.0m



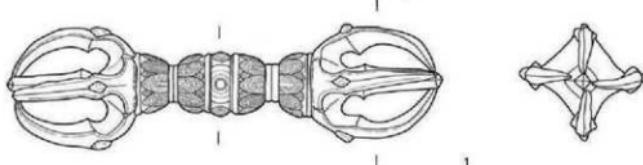
図版12

慈眼寺歴代住職墓 佛如墓・秀如墓 概要図

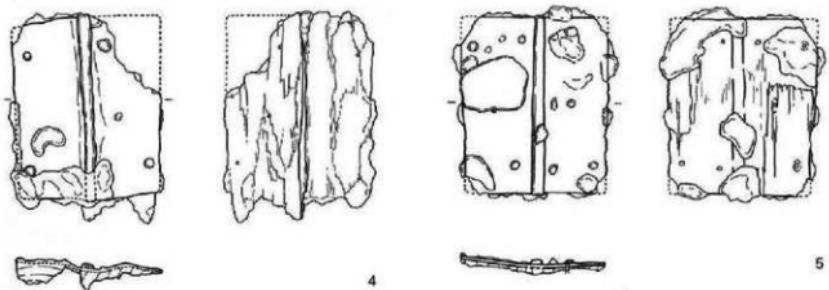
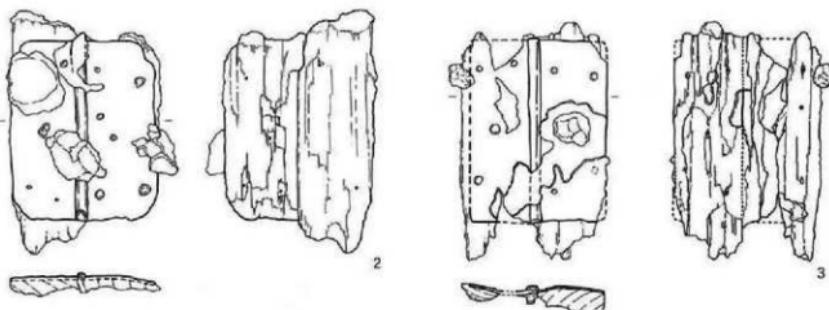


慈眼寺歴代住職墓 出土遺物 1

<佛如墓>

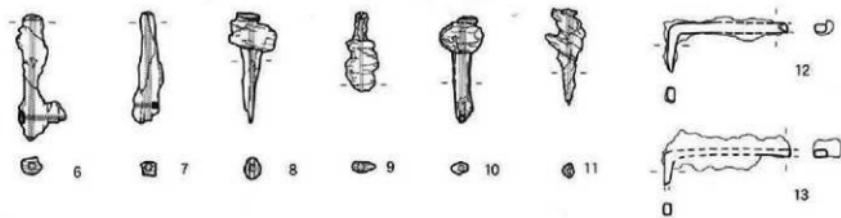


0 (1 : 1) 10cm

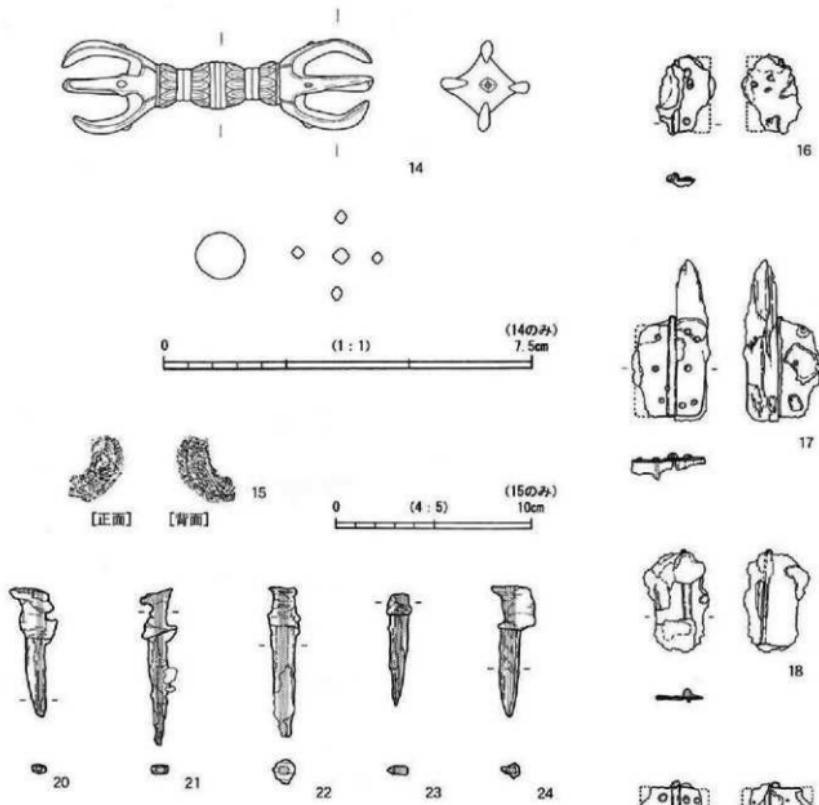


0 (1 : 3) 20cm

慈眼寺歴代住職墓 出土遺物 2



<秀如墓>

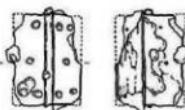


6～13：佛如墓

■ ■ ■ 釘（推測部分）

14～24：秀如墓

0 (1:3) 15cm (除：14・15)



19



佛如墓 1



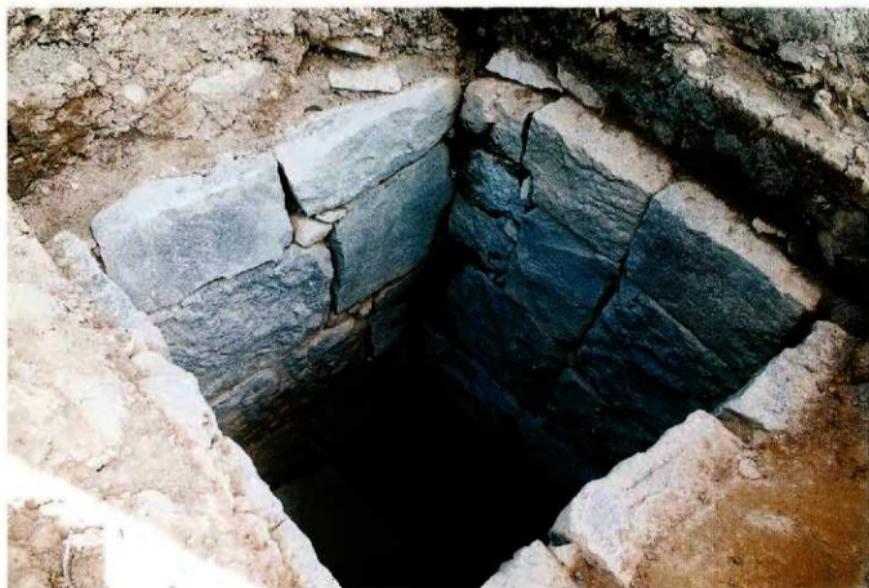
a. 石室

(南西から)



b. 五銘杵出土状況

(南西から)



a. 石室

(北西から)



b. 五銖杵出土状況

(西から)

歴代住職墓群 1



a. I～III地点から改葬された住職墓

(西から)



b. IV地点の住職墓

(北から)



※ a～e は吉川清司氏の撮影による。

歴代住職墓群 3



a. I 地点の基底部と石室

(北西から)



b. I 地点の基底部と石室

(南から)

調査



佛如墓 2



a. 墓標I-17 正面

(西から)



b. 墓標I-17 正面・側面

(北西から)



b. 墓標I-17 側面・背面

(南東から)



a. 墓標 I-17 移転後

(南から)



b. 石室A 蓋石除去後

(南から)

佛如墓 4



a. 石室A 土層断面

(西から)



b. 石室A 東半 墓主用具出土状況

(西から)



c. 石室A 西半 遺物出土状況

(北東から)



秀如墓 2



a. 墓標 I-16 正面

(西から)

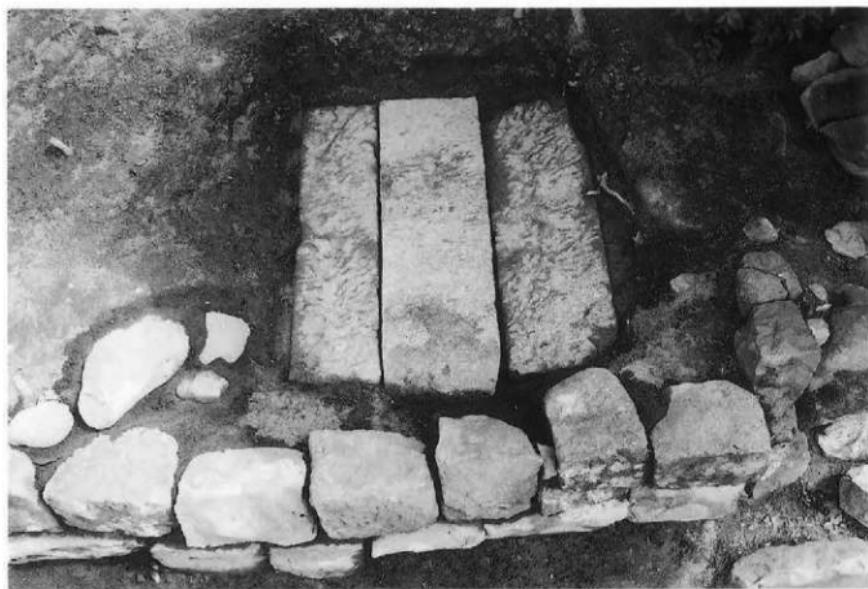


b. 墓標 I-16 側面

(北から)

b. 墓標 I-16 正面・側面

(南西から)



a. 墓標 I-16 移転後

(西から)



b. 石室B 蓋石除去後

(西から)



a. 石室B 土層断面

(北から)



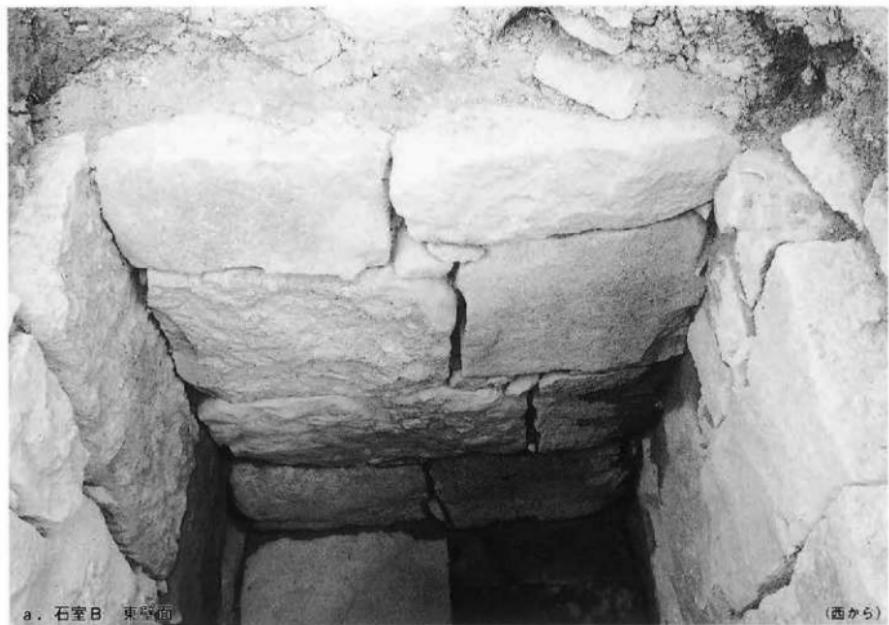
b. 石室B 南半 出土状況

(北から)



b. 石室B 北半 出土状況

(北から)



(西から)



(南から)



(北から)



(東から)



(西から)

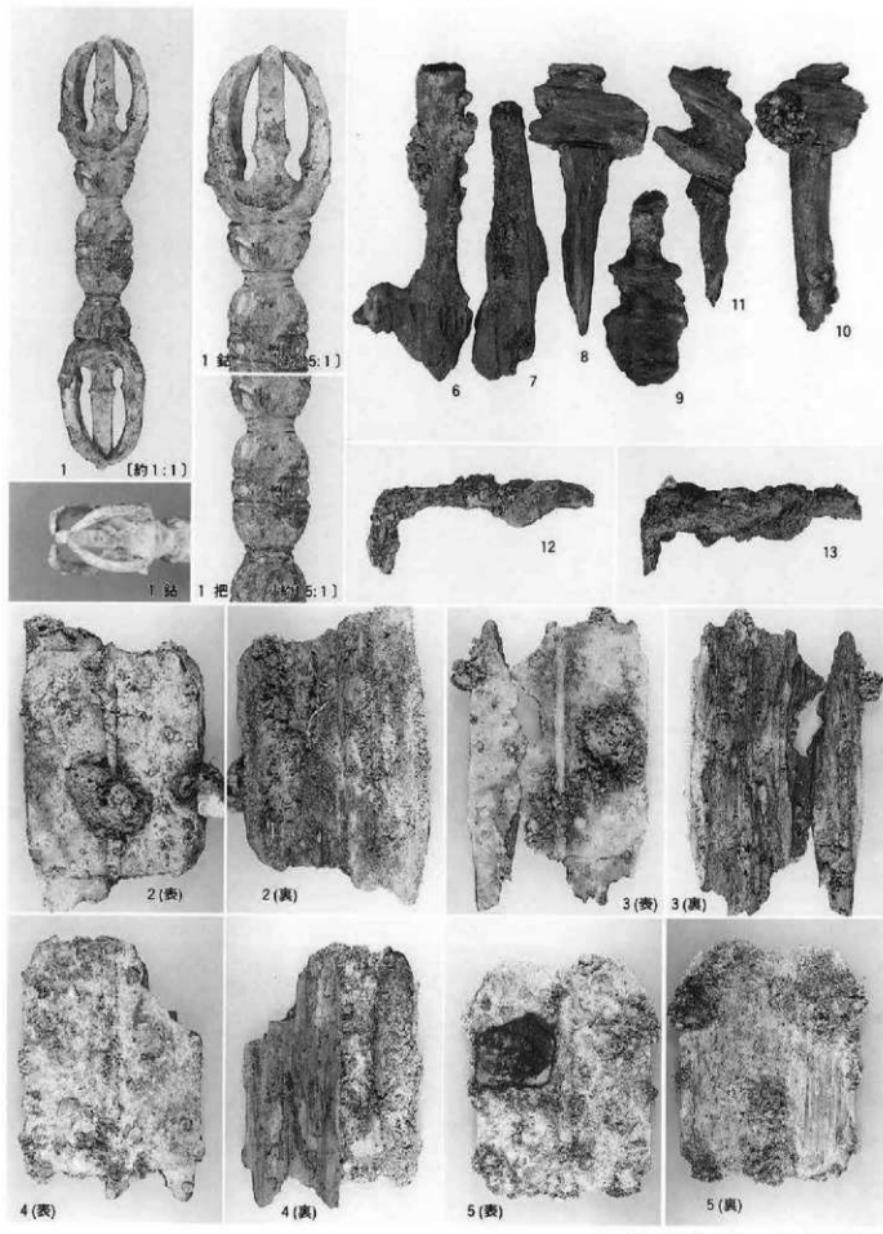
慧眼寺の石造物



g. 墓地「カミランドウ」遠景

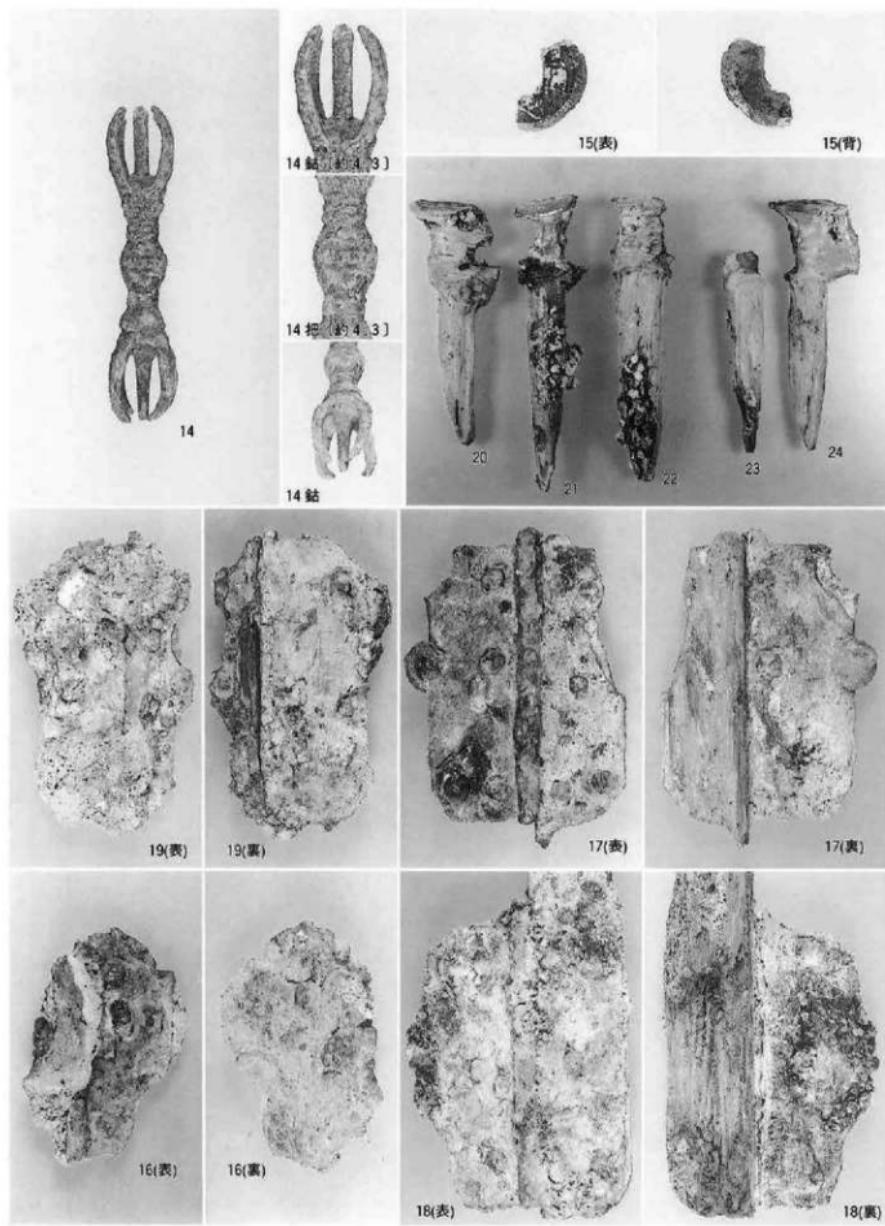
（南から）

（北から）



2~5 約1:2.5 6~13 約4:5

出土遺物 2



記載のない場合は約1:1

住職墓跡地



報告書抄録

| | | | | | | | |
|--------|---|--|--|--|--|--|--|
| ふりがな | じげんじれきだいじゅうしょくば | | | | | | |
| 書名 | 慈眼寺歴代住職墓 | | | | | | |
| 副書名 | 柏崎市谷根 慈眼寺歴代住職墓跡発掘調査報告書 | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 柏崎市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第44集 | | | | | | |
| 編著者名 | 伊藤啓雄 | | | | | | |
| 編集機関 | 柏崎市教育委員会 文化振興課（柏崎市遺跡考古館） | | | | | | |
| 発行者 | 柏崎市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50 TEL. 0257-23-5111 内線365 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2004年3月31日 | | | | | | |

| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 市町村 | 東経 遺跡番号 | 調査期間 西暦年月日 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
|---------------|--------------|-------|------|-------------------|--------------------|---------------------------|---|----------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 慈眼寺歴代 住職墓跡 | 新潟県柏崎市 谷根 | 15205 | | 37度 19分 24秒 | 138度 30分 21秒 | 20030408 ~ 20030418 | 約1.2 m ² | 慈眼寺からの依頼 |
| 所収遺跡名 | | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 慈眼寺歴代住職墓跡 | | 墓 | 近世 | 石室2基 | | 五鉢杵 蝶番・釘・銭貨 | 「天明六」(1786) 及び「文化十三」(1816) 銘のある墓標の直下からそれぞれ発見された石室内を発掘調査した。その結果、五鉢杵などが出土した。 | |

※ 北緯・東経は世界測地系に基づく。

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第44集

慈眼寺歴代住職墓

——新潟県柏崎市谷根 慈眼寺歴代住職墓跡発掘調査報告書——

平成16年3月22日 印刷

平成16年3月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50

印刷 協同組合 柏印会